



浜風に憧れて



来間夕口一

友との誓い

中学3年生の男子柴田は、大阪にある少年野球チームに所属しており、将来プロ野球選手になることを夢見て日夜練習に励んでいた。柴田が所属するチームは、毎年全国大会へ出場する程の強豪チームで過去5人のプロ野球選手がこのチーム出身である。その為関西圏では有名で、兵庫京都奈良和歌山といった近隣他県から通う選手も少なくない。

10月になると、3年生は卒業後の進路について監督と面談があるので、事前に親とある程度決めておく必要がある。そんなある日、練習後の帰り道で3年生3人が互いに情報交換をしていた。

「柴田、高校何処行くか決めたか？」

「色々悩んだけど、俺は兵庫の清田工業にするよ。私立は金が掛かるし、家から通える高校にしてくれて親から言われたんだ。前田はやっぱり地方へ行くのか？」

「ああ、青森の私立桑原大附属高校からオファーがあって、親も渋々だけど了承してくれたよ。」

「桑大附属って野球じゃ名門校だな。甲子園に過去10回以上も出場してるし、監督が2回甲子園を経験してるんだ。当時ベスト8まで進んだらしい。お前、そんな厳しいトコ耐えられるのか？」

甲子園:毎年8月開催の全国高校野球選手権大会、各都道府県代表校が出場する。

「当たり前前田の桑大附属だ。俺は1年から一桁(レギュラーの事、背番号1~9がレギュラーなのでそう言う)獲るからな。見てろよ~。それより、丹羽はどこ行くんだ？」

「俺は大阪のMT学園に行きたいんだ。そこで日本一を目指す。」

「やめとけ、部員100人超の古豪名門校じゃんか。絶対試合に出られないって、いくら高校が日本一になっても自分が試合に出られなきゃ意味無いぞ。な、俺達みたいに一桁獲れそうで、甲子園に出そうな高校にしとけて。」

「そんな弱気じゃ甲子園は無理だろうな。例え一桁は無理でも、背番号さえ貰えればベンチに入れる。そうすると試合に出るチャンスが巡ってくるかもしれない。そのチャンスを活かせば、スカウトの目に留まるかも。」

「丹羽、ワンチャンスをモノにしたからってスカウトされるかって。それより一桁付けて、試合で活躍して、一試合でも多く甲子園で名前を売った方が指名(プロチームが選手との交渉権を獲得する為のドラフト指名)され易いぞ。」

「そりゃそうだけど、俺は野球を始めた小学3年生の時から決めてたんだ。絶対、MTで甲子園に行くってな。」

この3人は別々の小学中学で接点は野球の時だけであったが、練習や試合で活躍する事で互いに認め合うようになっていた。そして将来はプロ野球選手になるという同じ夢を持っていた。その後、チームの監督と面談し、監督が選手に進路を提案する。選手の希望する高校から、その選手へのオファーがなければ推薦入学は出来ない。一般入試を受けて合格するしかないのだ。希望通りに進む選手もいれば、希望外のオファーがあった高校へ推薦入学するケースもある。

年が明けて2月、3人の進路が決まった。手堅い性格の前田は唯一オファーがあった桑大附属に推薦合格し、チャレンジ精神盛んな柴田は地方私立からのオファーもあったのだが清田工業へ推薦で合格した。そして燃える男丹羽は、第一希望のMT学園からのオファーは無く、他の地方私立からのオファーがあったのだが断り、一般入試でMT学園に合格した。

普通中学卒業は3月で、4月に高校へ入学してから野球部へ入部するのだが、例外もある。卒業前から早くも高校の練習に参加するケースだ。前田や柴田といった特別推薦入学者などがそうであった。

そして、青森に出発する前田を柴田と丹羽が新幹線のホームまで見送りに来ていた。

前田「じゃ、一足先に行ってくるよ。見送りサンキュー。」

柴田「おう、俺も明日から練習に参加させてもらうんだけど、通うのに片道2時間だけ気が重くなるよ。丹羽も寮に入るんだろ？そろそろ引越しじゃないのか？」

丹羽「いや、俺は一般入学だから練習に参加できるのは4月からなんだ。特推(特別推薦)の奴らは昨日入寮してると思う。」

柴田「そっか、悪い事聞いたな。」

丹羽「気にすんなって、じゃ前田、来月な。」

前田「ああ、じゃまた。」

前田と大きな夢を乗せた新幹線は出発した。それから1ヶ月が経ち、中学卒業式の日がやってきた。3人は別々の中学である為、式が終わってからいつも練習していたグラウンドで待ち合わせた。そして、久しぶりに会う球友と話は途切れず2時間程話が続いた頃、沈み始めた夕日を3人は黙って見ていた。

柴田「今日までチームメイトだったけど、明日からは互いにライバルだな。」

前田「ああ、今度会う時は敵だ。」

丹羽「じゃ、次は甲子園で会おう。」

3人は互いの健闘を願い甲子園での対戦を誓って握手をして別れた。

進む高校は違うが目指す場所は同じである。そんな3人の高校野球部物語が始まろうとしている

。

夢への挑戦

青森県私立桑原大学附属高校の前田、大阪私立MT学園の丹羽、そして兵庫の公立清田工業の柴田は、それぞれ1年生ながら一桁目指して練習をしていた。この3人が大阪では有名なチーム出身でも、甲子園を目指す強豪高校にとってはそんな選手はザラにいる。つまり、ごく普通の選手として扱われる。それが例え、特別推薦の前田と柴田であってもそうだ。特別推薦選手は他に幾らでもいるのである。

桑大附属前田の場合

前田は中学時代大阪名門チームの3番バッターで打率はチームNo.1、全国大会にも出場したこともあり、特別推薦を受け自信满满で桑大附属高に入学した。なので、自分が1年生の中では一番であっさり一桁獲れるだろと考えていた。しかし、現実はそのように甘くはなかった。何しろ他の1年生達のほとんどが全国大会出場者で、特別推薦者であった。それに野球部員の8割が県外出身者であり、その大半が出身地で一流スターになれなかった二流スターであった。出身地では二流でも地方では一流になって甲子園を目指す、そういう選手が多かった。また、地方私立高もそういう選手を狙うケースがあるのだ。

MT学園丹羽の場合

部員100人超のマンモスチームであり、全国から名のある選手を集めている高校だ。ここでは1軍2軍3軍予備軍の4部構成になっており、監督は1軍しか見ない。2軍以下はコーチやレギュラー崩れの上級生が見ている。特別推薦選手は2軍から、丹羽のような一般選手は予備軍からのスタートになる。丹羽は中学時代チームの4番を任せ近畿大会では打点王に輝いた事もある。しかし、ここでは並以下、最低ランクからのスタートである。自分で選んだ高校とはいえ、大変な場所に来てしまった。こんな事なら前田の言う通りに地方に行けば良かったと半分後悔していた。

清田工業高校柴田の場合

文武両道を目指す公立高校野球部で、勝つ為に有名選手を集めたりしない。自宅通学が入学の条件で、学業成績が振るわない生徒は部活停止、この高校で毎年数名の特別推薦を受けるのは成績優秀でスポーツの実績があり、自宅から通える柴田のような生徒であった。その為この高校では甲子園出場経験が無く、過去最高でも15年前の県大会ベスト8であった。甲子園を目指す柴田がこの高校を選んだ理由は親が進めたからではなく、3校オファーがあった内の清田工業監督がどうしても柴田が欲しいという熱意を感じたからだ。

柴田は中学では5番バッターで打点に絡む事も多く、バッティングセンスも良い、またチームのエースピッチャーとしても活躍していた。柴田は両親と中学チーム監督そして清田工業の監督と面談した際に、清田工業監督が言った。

「本校が甲子園に行くにはお前の力が必要だ。他校の様な好条件は出せないが、力を貸して欲しい。一緒に甲子園に行こう。」

こういう社交辞令的な発言は何処の監督も使うのだが、この時中学チームの監督が断言した。

「清田工業からは校風からオファーは来ないと思っていたが、この度初めてオファーがあった。今の言葉に偽りは無いと思う。楽な道ではないが、お前の性格に合っている、選んで間違いは無いと思うがな。」

柴田は即答した。「お誘いありがとうございます。喜んでお受け致します。」

4月になり一般入学の新入部員も入り、清田工業グラウンドは活気に満ちていた。部員数25名、野球未経験者も数名いる。柴田はそんな中で中学の実績から期待の新人スーパールーキーと呼ばれていた。

「ヨーシ、皆集まれ！」

副将の指令で皆集合した。そこには監督、主将、マネージャー、部員、新入部員と野球部関係者全員が揃った。

「今日から新入部員が正式に入部扱いとなり、特推の新人を含め15人が新たに正式加入した。我が野球部員は選手25名、マネージャー2名となった。これより主将の挨拶がある。」

「主将の織田だ。どんな理由で本校の野球部に入部したのかは知らんが、入ったからにはトコトコやってもらう。やる気の無い奴は今すぐ辞めてくれ。また、中学ではソコソコ実績があり特推で入って来た奴もいるようだが、ウチをナメてるようならヨソ(他校)へ移ってくれ。俺達が目指すのは甲子園だ。」

主将の指示で選手達がグラウンドに散り、練習が始まった。この時柴田は覚悟を決めた。

「特推扱いも昨日まで、今日からは皆同じ条件だ。ヨーシ、エースNo.1獲ってやる。前田、丹羽負けんぞ！」

ピッチャー志望の柴田が狙うのはエース(背番号1)である。周囲を見渡すと自分より投げるが速いピッチャーは見当たらない。つまり、1年生の自分がエースになっても不思議でないと柴田は考えていた。自信ありげに投球練習をする柴田に副将の林が声を掛けた。

「よう、スーパールーキー、速い球投げるじゃねえか。」

「ウッス、副将、自分は中学ではエースで全国大会に出ました。直球には自信あります。」

「そうか、そのスピードはバッティングセンターでの丁度良い打ちごろのスピードなんだよな。」

」

「そうすか、じゃ打ってみますか？」

「おう、天狗の鼻をヘシ折ってやるぜ。」

チーム内でのモメ事は信頼関係を崩し、練習の邪魔になる行為で迷惑千万なのだが、監督主将も素知らぬ顔。3年生達は、ニヤニヤと二人の対戦を楽しみにしている様子。どうやらこのチームでは毎年4月に行われる出来事で、上級生による特推選手の品定めらしい。今年の特推がどれ程の力なのか確かめようとしているのだ。

もし簡単に打たれるようでは今年の新人は不作で、上手く抑えれば豊作と判断される。しかし、試す方の副将も内心緊張していた。打てなければ先輩としてのメンツ丸潰れ、その程度で副将かとチーム自体がナメられるのだ。

グラウンドには2,3年生が守備につきピッチャーはスーパールーキー柴田、そしてバッターは副将林。互いのプライドを掛けた真剣勝負である。

「じゃ、行きますよ！」

「来やがれ！一年坊主！」

初球ストレートは見送りストライク、2球目のカーブは1塁側へのファウル、早くも副将を追い込んだ。3球目は高目のストレートで三振を狙ったが、副将は見送りボール。

声に出さないが、柴田の考えはこうだった。

「副将め、ストレートには手を出さず、カーブを狙ってやがる。ここはストレートで抑えてやるぜ。」

4球目、甘く入ったストレートを副将は見逃さず、センター前へと打ち返した。結果ヒットで、副将の勝ちとなった。打った副将は柴田に罵声を浴びせるところか、打って当然という顔で監督と主将のいるベンチへと走って行った。一方、打たれた柴田は悔しさを内に秘め、投球練習を再開した。

監督「林、柴田の球はどうだった？」

林「はい、結構重い球で今でも手が痺れています。球速は想像以上に速くて、とても1年生の投げる球とは思えませんでした。」

監督「ほう、思った通りだ。主将織田に続く次世代のエースとして期待できそうだ。織田はどう見た？」

織田「球速は自分より速いと思いますが、攻め方が粗いと言うか雑と言うか、気分次第で投げているように思えます。ああいう性格だと、ピンチを迎えた時に自分を見失い大量失点に至るケースが想定できます。」

監督「そうだな。そこはお前達が上手く育ててやれ。何しろ奴は未完の大器だからな。」
織田,林「判りました。」

スーパールーキー柴田は勝負には負けたが、チームにとっては豊作のようであった。練習が終わり、帰宅電車で揺られながら柴田は、打たれた悔しさを思い出していた。

「チキショー副将め、カーブ狙いに見せかけて最初からストレートを打つつもりだったんだ。覚えてろよ、次は三振にしてやる。」

とボヤキつつも練習に疲れて心地良く揺れる電車で、今夜もウトウトとしてしまう柴田であった。

「ちょっと、お客さん。終点だよ。」

「えっ、あっ、すみません。ありがとうございます。」

「毎日大変だね、頑張りなよ。未来のメジャーリーガー！」

「ウッス!!」

夢への挑戦はまだ始まったばかりである。

ブレイン

清田工業高校に通う柴田の学科はIT学科で主に電気系やシステムプログラムなどを学ぶ。この学科は生徒40名の内男女比率は50:50である。ただ他の学科には女子生徒が少なく男子高のような雰囲気、IT学科だけが男女共学のような雰囲気であった。5月になり高校生活やクラスメイト達にも馴れてきた頃、柴田の心は落ち着かなかった。ある日の昼休み、いつも一緒に弁当を食べている島津が切り出した。

「どうした柴田ボーッとして、弁当がマズいのか？」

「いや、そういう訳じゃない。ちょっと考え事してたんだ。」

「どうせ野球の事だろ、どうしたらもっと速い球が投げられるかとか。」

「ちがーう、野球じゃない。」

「お前野球以外は何も考えてないんじゃない？」

「失敬な！他にも色々考えてるわい。」

「へえー、グラウンド以外はクラゲみたいにフワ～っとしてるのかと。」

「誰がクラゲだ！やっぱり島津に話すのやめとこ。」

「なんだよ言えよ、気になるだろ。」

「実はな、今朝俺の下駄箱に手紙が置いてあったんだ。」

「果たし状か？請求書か？」

「いや、その、どうやら女の子からみたいで放課後図書室で待っていると。」

「ほほ～、で行ったら男子上級生が数人待ってて、他の場所へ連れて行かれてボコボコにされると。」

「やっぱり島津もそう思うか？実は俺もそんな気がしてならないんだ。」

「もしかして過去にそんな経験があったのか？」

「ああ、二回程。」

「うう、辛いな。俺は助けてやれんけど、後日目撃者として匿名で証言してやるからな。」

放課後不安を隠しきれない柴田は足取り重くうつむいて図書室へと向かった。柴田はこれまで彼女ができず、デートすらした事がなかった。なので、こういう場合純粋に女子から告白されるかもなどとは想像できなかった。頭に浮かぶのは過去の悲惨な経験だけだった。

「今日逃げたって、いつかまた捕まるくらいなら今日だけで済ませよう。えーと、図書室の文学書コーナーか。」

手紙に書いてある場所に着くと、そこには女子3人が待っていた。どうやら同じクラスの子のようだ。見たところ殺気は感じない。大きく深呼吸して柴田は話しかけた。

「柴田だけど、手紙置いたのは君達？」

「うん、そう私が書いて置いたの。来てくれて良かった。」

二人に背中を押されるように真ん中の女子が答えた。

「あの、俺部活があるから、あんまり時間無いんだけど用件は何か？」

「私、柴田君が好きです。付き合ってください。」

真ん中の女子は赤く頬を染め恥ずかしそうに自分の想いを伝えた。一方、初めて告白された柴田は、予想外で急な出来後に動揺していた。

「きゅ、急に来るんだね。こういう事って。びっくりしたよ。で、本当に俺の事を？」
女子は黙ってうなずいた。柴田も赤くなり、何を話して良いか解らなくなっていた。

「今彼女とかいるの？」

「いない。」

「好きな子は？」

「それもいない。」

「じゃ、私は？」

「あ、俺で良かったらOKデス。」

告白した女子は涙目で喜び、後ろの女子二人は声を上げて喜んだ。柴田は初めての事に照れていた。

付き合う事になった二人は電話番号とメールアドレスを交換し、軽く握手をした。

「じゃ、俺部活があるから、今日はこの辺で。」

「うん、野球頑張ってるね。」

恥ずかしさと嬉しさを隠せない柴田は、ニヤけた顔でグラウンドに走って行った。グラウンドではベースやボールを出したり、フェンスを置いたり練習の準備が既に始まっており、遅れて来た柴田には同級生達から文句を言われていた。

「コラ柴田、遅いじゃねーか。殆ど終わりだぞ。残りの準備はお前一人でやれよっ。」

「ガッテンだ！」

てっきり柴田は言い訳したり逆ギレするのかなと思いきや、素直に同級生達の指示通り準備を始めた。しかもふて腐れた顔ではなく、晴々とした表情で。

「おい、柴田の野郎なんだか気持ち悪いな。」

「ああ、いつも変だけど今日は普通に増して変だ。絶対何かあったな。」

1年生による準備が終わる頃、上級生達がグラウンドに集まりだし3年生の女子マネージャーが準備を終えた1年生に話しかけた。

「どうしたの？何が変なの？」

「ウッス松平先輩、実は今日遅れて来た柴田に罰として残りの準備を一人でやらせたのですが、あの野郎ウキウキしてやってるんです。」

一人で準備する柴田を見た松平は半笑いで話した。

「ふ〜ん、ナルホドね〜、そういう事ね。」

「何が解ったんです？」

「まず間違いないと思うけど、チョット確かめてくるわ。」

ストレッチを始めた部員達を尻目に松平は柴田に問い掛けた。

「柴田君、今日はなんだか楽しそうね。何か良い事あったの？」

「ウッス、別に無いっす。準備終わりました。」

「隠しても無駄よ、部員の様子がいつもと違う事ぐらいマネージャーやってれば気が付くの。」

「へー、俺なんかの事も見ててくれたんすね。ま、さっきチョット良い事があって気分良いんす。」

「女の子から告白されたとか？」

「な何で解ったんすか、松平先輩ってエスパーっすか？」

「女のカンってやつよ。で、どう返事したの？」

「断る理由も無いので、OKしました。」

「折角良い気分のところ申し訳ないんだけど、ウチの部じゃ男女交際禁止なの知らないのね。」

「えっ？マジっすか？知りませんでした。どうすれば良いんすか？」

「別れるのね。」

「ついさっき告白されて、今日から付き合うようになったんすよ。イキナリ今日別れですか。彼女怒るだろうな。」

「そうね、刺されるかも。」

「まだ死にたくないです。」

「じゃ野球部を退部するしか無いわね。」

「そんな！どうしても甲子園に行きたいんです。野球部に残りたいです。」

「じゃ、さっきの話は聞かなかった事にするわ。せいぜいバレないように上手くやるのね。」

「助かります、松平先輩！」

今までニヤついていた柴田は、気を引き締めいつもの顔に戻った。そしてストレッチの輪に加わり、皆とランニングを始めた。丁度その頃、監督が現れ松平に尋ねた。

「ウッス、松平くん。どうだ今日の選手達は、何か変わった事は無いか？」

「こんにちは監督。今日も全員参加で体調不良者故障者ゼロですが、一人浮かれた1年生が居たのでシメときました。」

「ウムさすがだね松平くん、頼りになるマネージャーだよ。気が緩んだまま練習してるとケガするからな。」

「恐縮です。」

午後6時頃、基本練習が終わり試合形式の練習が始まっていた時、主将の織田と松平が監督に呼ばれた。

監督「来週の練習試合の選手だが使えそうな1年生はいるか？」

織田「1年では柴田と木下が使えそうです。他はまだ少し時間が掛かるかと思います。」

松平「私も同意見です。二人共即戦力と考えて良いかと。」

監督「実はな練習試合の先発投手には柴田を考えてるんだが、どうだろう二人の意見を聞かせてくれ。」

織田「先発が自分ではなく柴田ですか？」

監督「そうだ、勿論ウチのエースは織田に違いない。本来なら織田を先発させるのだが、柴田に

経験を積ませたいのだ。」

織田「投手の経験なら途中からでも出来るのでは？自分が先発で、後から柴田ではどうでしょう？」

松平「私は賛成です。エースが途中降板して1年生に救援してもらうのはエースのプライドが許さないわよね？主将。」

織田「うーん、まあそうだけど。前半は俺の変化球で翻弄して、後半は柴田の速球で抑えた方が良かった。」

監督「それは理想的な展開だがまだ柴田には早過ぎる。後半は点差が開いていたり、ランナーを背負うケースも増えて来るし、マウンド度胸も必要だ。だから先発で経験を積ませて、ゆくゆくはクローザーに育てたいんだ。」

松平「同感です。主将と柴田君の継投なら、そう簡単には打たれません。それに主将が引退した後は柴田君がエースになるでしょうし、良いチャンスだと思います。」

監督「どうだ織田。」

織田「柴田先発の狙いが理解出来ました、異論ありません。」

監督「ヨシじゃ松平くん、今週中に敵のデータを取っておいてくれ。」

松平「ご心配無く、もう調べてありますから。」

監督「素晴らしい松平くん、完璧なマネージャーだね。」

織田「さすがウチのブレインだね。恐れ入るよ。」

練習試合での先発が告げられた柴田は、一層気合が入り柴田に引っ張られるように部員達も闘志を燃やし始めた。そして柴田は、練習後帰宅電車で揺られながら彼女に練習試合の事をメールすると直ぐ様返信が来た。練習後の疲れと試合への期待、そして初めてできた彼女の嬉しさで、グッスリと寝てしまったのである。

「お客さん、終点だよ。」

「あ、どうもです。」

「今日もお疲れ、家まで頑張れよ。」

「ウッス！」

理想と現実

今日は毎年恒例となった清田工業高校対黒田商業高校との練習試合である。この両校の監督は高校の同級生であり、同じ野球部で甲子園を目指していた仲であった。残念ながら当時の甲子園は夢と変わったが、互いに高校教員となり野球部の監督として現在甲子園を目指している。その監督同士が互いに吸収し切磋琢磨して強くなろうという思いから恒例試合となった。

午前10時に黒商チームが清工グラウンドにやって来た。そして両校の主将同士監督同士が挨拶を交わす。

「ウッス、黒商野球部主将の赤松です。今日はお招きありがとうございます。」

「ウッス、ようこそ清工グラウンドへ。主将の織田と言います。今日はよろしくお願ひします。」

「今日の予定は？」

「午前中は両校1時間づつ練習し12時から昼食、午後1時から試合開始です。まずは黒商さんから練習どうぞ。」

「いえ、ウチは移動して来たばかりなので少し休みたい。また準備もあるので清工さんから練習して貰えるとありがたい。」

「解りました。じゃ、そうします。」

「助かります。」

織田の号令で清工野球部員達がグラウンドに散り、大きな掛け声と共に練習を始めた。黒商チームはゆっくりとユニフォームに着替えたりスパイクに履き替えたりと準備をしながら、清工チームの練習を観察していた。

敵チームの練習を見る事で長所短所を調べるのである。また、打球の飛距離や方向などから攻め方を分析するのである。そして敵ピッチャーの投球練習から自チームの打順を決めたりもする。

12時過ぎ、両チームの練習が終わり昼食タイム。黒商チームは何やら作戦会議をしながらのシンミリとした昼食であるのに対し清工チームの昼食は何やら賑やかであった。

織田「林、何か1年達が騒がしいぞ注意してこい。」

林「解りました主将。」

林「おい1年！うるせえぞ、何事だ。」

1年「あ林副将、実は柴田の弁当が。」

林「柴田の弁当？柴田見せてみる。うっ、これは、、」

柴田の弁当を見た林は織田のところへ走って行った。

林「主将、柴田の弁当が。」

織田「奴の弁当がそんなに珍しいのか？」

林「はい、弁当にタコがいました。」

織田「副将ともあろう林しっかりしろよ。タコのどこが珍しいってんだ？活きたタコでも入っていたか？」

林「いえ、ソーセージの姿をしたタコが、じゃなくてタコの姿をしたソーセージで、目玉も有り鉢巻もしてました。あれはきっと女が作ったに違い有りません。」

織田「なんだと！！」

織田は血相を変えて柴田のところへ走って行った。

織田「柴田弁当を見せろ！」

柴田「ウッス、何すか一体？副将の次は主将っすか？」

織田「コレは女が作った弁当だな？お前男女交際しているのか？」

柴田「ま、まさか、女には違い無いすけど母さんですよ。」

織田「嘘を付け！朝のクソ忙しい最中に母親がこんな手の混んだ弁当を作る余裕など無いはずだ。しかも『がんばって♡』などの文字を母親が入れるか！林の弁当などは、おかずに昨日の夕飯の残りなんだぞ。他の部員達もコンビニ弁当やパンだ、コレは絶対女が作っているに違いないっ！」

普段は冷静沈着な織田が珍しく取り乱していた。事実柴田の弁当は彼女が作ったモノであり、とっさに付いた嘘はバレバレで柴田は追い込まれていた。

松平「チョット！いい加減にしなさいよ、主将！」

織田「松平、しかし柴田は、、」

松平「大の球児達が集まって一人の1年生を追い詰めて、みっともないわねー。恥ずかしくないの!？」

織田「しかし、コレは、、」

松平「良いじゃない、女の子が作った弁当でも。交際してなけりゃ良いんでしょ？どこかのファ

ンが作ったのかもしれないわよね？柴田君。」

柴田「そ、そうなんです、実はファンからのプレゼントでして、嘘付いてすみませんでした。」

織田「ち、そうかよ良い気なもんだな。今日の試合でヘラヘラしてやがったらシバキ回すからな、覚えとけ！」

柴田「ウッス！気合入れときます！」

賑やかなランチタイムが終わり、試合開始の時間がやってきた。両チームが整列しオーダーを交換して、一斉に挨拶をして試合開始である。(オーダー:先発及び控えの出場選手名簿)

先攻は黒商、後攻の清工が守備に付いた。

黒商ベンチでは

「あ、先発柴田は1年生ですよ。」

「くそナメやがって。オイお前ら先発は1年坊主だ、初回からガンガン行って柴田を引きずり降ろせ！」

「おおっ！」

試合が始まり1番打者が打席に入った時、マウンドの柴田はグラウンドの片隅から柴田を見つめる彼女の存在に気付き、思わずニヤリとなったが直ぐ様気を引き締めた。

「危ねえ、危ねえ、ヘラヘラしてたらシバキだからな。さて、ほんじゃ行くぜ。」

柴田には野望があった。それは、今日の先発はお試し起用だが初回からピシャリと抑えて、エース織田の出番無く自分一人で完封勝利。彼女も大喜びでホレ直され、次回からは自分がエースに取って変わるといふ、なんとも自分勝手な考えであった。

しかし、実際は思うように制球が定まらず1番打者をストレートの四球、彼女の前で良いところを見せたいという思いもカラ回りして2番打者も四球で、ストライクを1つも取れずにランナー1塁2塁のピンチとなった。

清工ベンチでは

監督「何やっとなるんだ、あのバカ。ストライクが入らんじゃないか。」

松平「ま、多少力みが有るのかもしれませんがね。」

こうなると攻める黒商は、積極的に打ちに行くのではなく待つ作戦に出た。3番打者は2ストライクを取りながらも結局四球、ノーアウト満塁で迎える打者は4番という初回から大ピンチとなった。

押せ押せムードで余裕の表情なのは黒商監督、反対にドキドキハラハラで苦痛の表情は清工監督

。かつての球友は対照的な状況を迎えていた。

柴田「ヤバイ、ヤバイぞ。これじゃ良いトコどころかハジをさらす事になるぞ。ようし、ここは落ち着いて確実にストライクを取りに行こう。」

柴田がビビって投じた初球を4番打者は見逃さずフルスイングした。打球は右中間外野フェンス直撃の走者一掃タイムリースリーベースヒットで、一挙3点を奪われた。マウンドでは打たれた柴田が呆然としている。

清工ベンチでは

松平「制球定まらず四球でランナーを貯めて、苦し紛れに取りに行った甘いストライクを打たれる。お粗末な一人相撲の見本ね。柴田君立ち直れるかしら。」

監督「見ちゃおれんわい。織田、肩作っとけ！(投手交代の準備として投球練習をしておけ)」

織田「解りました。(あの馬鹿め、試合後キッチリとシメてやる。)」

ノーアウト3塁で続く5番打者はセンターへの外野フライ、タッチアップでランナー生還4点目が入った。織田が投球練習を始めた事に柴田は気付いていたが、織田の顔を見る事ができなかった。それどころか遠くから見守る彼女の顔すら見れないでいた。そんな柴田に無情のヤジが飛ぶ。

「ハイハイどうしたスーパルーキー。早くも交代か？」

「情けねえな、彼女が泣くぞ。」

「降りろ、降りろへポピー(ピッチャー)」

これらのヤジは全て味方の清工ベンチからのヤジであった。通常このようなヤジは敵チームから投げられ、味方チームからはフォローの言葉が出るのだが、この場では全く違うようだ。実はこのヤジは清工監督の指示で清工部員が投げていたのだ。何故このような傷口に塩をつける様な事をするかは、監督に考えが有った。

柴田「畜生！！」

マウンドで悔しがる柴田を遠くから見つめる彼女は気付いた。さっきから全然自分の方を振り向かず避けている様である。もしかして自分は今ここにいないほうが良いのではと。そう察した彼女はグラウンドから去って行った。

清工ベンチでは

織田「女の子が帰ったようですね。」

監督「ヨシ、それで良い、ここからがスーパルーキーの見せ場だ。」

松平「監督、わざと柴田君を怒らせて女の子を帰したんですね？」

監督「そうだ、ワシは柴田の試合を中学リーグで見てきた。柴田に足りないのは闘志だ。しかし、これで奴の闘志に火が点いだろう。」

柴田「さて、これでもうどんなハジをかいたって彼女に見られる訳じゃ無い。トコトンやってやるぜ。」

彼女が帰った事に気付いた柴田は開き直っていた。それが良い方向に傾き、制球が定まる様になってきたのである。後続の打者を凡打で打ち取り、柴田はさっそうとベンチに帰って来た。

織田「コラ柴田、初回から4点も取られやがってスーパールーキーが聞いて呆れるぜ。」

柴田「ウッス！すみません。今から1点もやりません。」

織田「さあ、皆！反撃だ！」

「おおっ！」

柴田の闘志に引っ張られるかのように、それ以降は引き締まった試合展開になっていた。

黒商打線は立ち直った柴田の速球を上手く打てず、2回以降は0点が続いた。それに対し清工は少ないチャンスを確実にモノにして行きジリジリと追い上げて行った。試合は4対3で迎えた7回裏清工の攻撃1アウト1塁で打者は柴田であった。監督からのサインは『任せた』である。

柴田「よーし、ここは確実に送りバントだな。」

高めのボール球を無理矢理バントにあってファウル。これに監督は激怒した。

監督「柴田！交代だ。代打織田。」

柴田「えっ、まだ1ストライクで打席の途中ですよ。」

織田「どけ柴田、交代だ。」

柴田「ウッス、主将。」

柴田は渋々ベンチに下がり、タオルを頭から被った状態で下を向いていた。

「クソ、任せたって指示だったのに、1球バント失敗で交代かよ。」

納得の行かない交代に柴田は心の中で叫んでいた。

一方、代打織田はセンター頭上を越えるタイムリーツーベースヒットで、4対4の同点に追いついたが反撃もここまで。投手織田は8回9回黒商打線を一人のランナーを出す事も無く完璧に抑えた。清工打線はランナーは出すのだが得点には至らず、結局4対4の引き分けに終わった。試

合後、両校の監督が握手をして挨拶をしている。

「イヤー序盤は荒れましたが、良い試合でしたな。」

「本当ですね。延長戦をやりたい位ですよ。」

「全くです。では、次回夏の県予選でお会いしましょう。」

「はい、本日はありがとうございました。」

「では、お気を付けて御帰り下さい。」

両監督の社交辞令挨拶が終わり、黒商チームは帰って行った。そして残った清工チームは反省会である。言うまでもなく、柴田が監督から呼ばれた。

監督「初回4失点を除けば良い出来だった。しかしアレが無ければウチは勝っていたぞ。結果は引き分けだが、勝てた試合を落としたのは事実で、今日の試合は負けみたいなものだ。」

柴田「ウッス、自分のミスでした。」

監督「何故ミスをした？」

柴田「えっと、そのエースを獲りたくて、つい力みました。でも自分は未だ未だ主将には及ばない事が解りました。」

監督「理由はそれだけか？他にもあるだろう、正直に言ってみろ。」

柴田「じ実は、彼女の前でカッコ良いところを見せたくて、それで、、」

監督「ウチが何故男女交際を禁止しているか解るか？」

柴田「いえ、未だ知りません。」

監督「正に今日のお前が具体的な例だ。女を意識し過ぎて持っている力を発揮出来ず自滅する。そればかりか、女までもが傷付いて二人の仲がギクシャクする。おまけにチーム内に戸惑いが生じるんだ。解るな？」

柴田「ウッス。よく解りました。」

監督「今の時代男女交際するなと言う方が無理だ。明日からの事は主将と相談して決めろ。ワシからは以上だ。」

柴田「ウッス、ありがとうございました。」

織田「柴田、お前は今日限りでクビだ。明日から来るな。」

柴田「主将、明日から気合い入れ直します。お願いします！」

織田「俺達は真剣に甲子園を狙ってるんだ。お前みたいに浮ついた奴がグラウンドに居るだけで迷惑なんだよ！」

柴田「主将、これで最後にします。もう一度だけチャンスを下さい。」

松平「主将、柴田君にラストチャンスをあげたらどうかしら？」

織田「しかし他の部員達にスジが通らんぞ。」

松平「柴田君、こういうのはどうかしら？野球の練習や試合には彼女を呼ばない。勿論彼女お手製の弁当も禁止。部員には彼女の話は一切しない。部活以外で彼女と会うのはOKよ。それもでも今日のようなミスをしたなら即クビ。」

柴田「ウッス、ありがとうございます。松平先輩！」

柴田は喜んでグラウンドの後片付けを始めた。

織田「松平、いくらチームのブレインでもやり過ぎじゃないのか。俺の主将としての立場が無いじゃないか。」

松平「あら、カッカしている主将の代わりに冷静に判断してあげたのよ。それともメンツを張ってクビにして、柴田君抜きで甲子園へ行けるの？」

織田「でも、それじゃあ奴はつけ上がるぞ。」

松平「そこをビシッとシメるのが主将でしょ？」

織田「解ったよ。そうするよ。」

松平「じゃ、決まりね。」

この日柴田は帰宅電車の中から彼女に長文メールを送った。今日の試合の事、彼女が帰った後の出来事、そして今後の事について丁寧に説明した。すると、彼女から返信が来た、どうやら理解をしてくれた様だ。

「お、解ってくれたんだ。良かった。」

試合疲れと緊張開放、そして彼女の存在という安心感に加え適度の電車の揺れが柴田を眠りに誘う。

「柴田君、終点だよ。」

「あ、いつもすみません。僕の名前を知ってたんですか？」

「カバンに刺繍してあるだろ、それ読んだのさ。お疲れ。」

「ウッス！」

スイッチのONとOFF、夢への挑戦もメリハリが必要なようです。

それぞれの思い

夏の全国大会県予選のひとつ兵庫県大会は参加校数160を超え全国でも6番目ぐらいに多い大会であり、この中の頂点に立つ高校だけが県代表校として甲子園に出場出来る激戦区である。ちなみに東京都からは西東京ブロックと東東京ブロックから計2高が選出される。開催期間は7月上旬から約3週間に渡り熱戦が行なわれ、柴田の所属する清工が甲子園へ出場するにはこの県大会で優勝するしかない。

清工部員は6月になると県大会まであと1ヶ月という意識から一層熱の入った練習を行っていた。また3年生部員にとってはこの大会が高校部活最後の大会であり、負ければ部活引退となるので覚悟を決めての挑戦となる。

主将「オイ！全員集まれ！」

ある日の練習が終ろうとしている頃、主将の掛け声で全員が整列した。

監督「県予選まであと1ヶ月となった。明日から正式な選手登録までの間、いつも通り暫定レギュラーを定める。」

「ウッス！」

ここで言う暫定レギュラー制度とは清工が独自に実施している制度で大会1ヶ月前からレギュラーを暫定し、そのまま変更が無ければ決定となる。暫定レギュラーは練習時に一桁の背番号を付けて練習するが、競合選手の方がレギュラーに相応しいと判断されれば翌日から暫定レギュラーが変更になる。

この制度は背番号を付ける事でレギュラーへの競争力、執着心が強くなるのが狙いである。絶対にポジションを死守するという思いと、絶対にポジションを奪ってやるという思いがぶつかっていく。

そして監督から暫定レギュラーが発表されたが、その中には柴田を始め1年生の名前は出なかった。

柴田は心の中でこう呟いた。

「やっぱ主将がエースか、まあ仕方ない。ベンチ入り目指して頑張ろう、二桁番号の投手が活躍するケースも多いしな。11は俺のモンだ。」

(背番号11はエースに次ぐ二番手投手に付けられる事が多い。)

背番号を背負って練習すると一層気合いが増すようで、部員達は真剣そのものであった。そして、背番号を付けてから2週間が過ぎたころ、柴田が監督から呼ばれた。

監督「柴田、調子はどうだ？」

柴田「ウッス、順調です。下半身強化の効果で直球も速くなったと思います。」

「そうか、ところで織田と投げ合ってみるか？」

「えっ？投手勝負ということでしょうか？」

「そうだ、試合形式で守備を着かせランナーを背負いながら、どっちが速いストライクを投げるかが勝負だ。」

「速球なら自分の方が速いかと、、」

「速ければ良いってもんじゃない、どっちが速いストライクを投げるかだ。」

「あ、それは主将には敵いません。」

「ほう、随分大人しくなった、いや、利口になったな。しかし勝負の世界にそんなサル知恵はいらん。」

「いえ、別にそんなつもりはありません。」

「清工ではな、一番遠くへボールを打ち返す奴が4番打者、一番速いストライクを投げる奴がエースなんだ。年や経験実績なんぞ関係ない。」

「えっ？じゃ自分がもし主将より速いストライクを投げれば？」

「清工のエースはお前だ。」

「それで、主将は納得するのでしょうか？」

「当然だ、毎年の事だしな。主将の織田だって、そうやって先輩から背番号1を奪ったんだ。」

「主将に挑戦させてください。」

「よし、良いだろう。」

監督と柴田が話をしている間にグラウンドでは試合形式の勝負準備が進んでいた。そして柴田が挑戦を決意した頃、マウンドには織田がいた。織田は既に覚悟を決めていたのだ。

監督が部員達に勝負の説明をして、守備やランナー、そして投手の球速を測るスピードガンが配置された。

この勝負は共に5球を連続で投げ、ストライク時の球速を加算していく、この加算球速が多い方が勝者となる。

監督「それでは県大会のエースを決める勝負を行う。暫定エースの織田に柴田が挑戦する。」

「ウッス！」

グラウンドに居た部員達が勝負を了承し、立会人となる。スピードガンを持つのはマネージャーの松平。

これでもう、逃げられない。どちらかが勝者であり、敗者となる。

監督「先攻は暫定エースの織田！」

織田「ウッス。」

織田が投じた5球の内4球がストライクでMAX 138km/hであり、最高速度を狙うのではなくストライク先行の安定した投球を狙った。

監督「後攻、挑戦者 柴田！」

柴田「ウォアッス！！ シャーっす！！」

妙に気合いの入った柴田であったが、初球142km/hを出すもボールでカウントされず。ビビって投じた2球目はストライクであったが、132km/hとスピードダウン。深呼吸をして3球目は135km/hと加算する。何しろ、ストライクが入ってナンボ、幾ら速くても加算されなければ意味がない。柴田はどうやら、織田と同じ作戦に出たようだ。

そこで監督は柴田にゲキを飛ばした。

監督「コラ、柴田！織田と同じ投球するならお前は要らん。なんの為に前を特推したと思うんだ！」

柴田「か、監督、」

柴田は自分のどこが期待されているのかがようやく理解できた。同時に主将織田は柴田に嫉妬し、他の部員は監督がどれ程柴田を見込んでいるかが想像できた。

柴田「おーし、残り全部速球でいくぜ。」

4球目ストライクの140km/hでMAXスピードは主将を超えた。ラスト1球、柴田は感じ取っていた。

柴田「俺に期待されるのは、コントロールではなくスピードだ。スピードを落としてストライクを取るのではなく、投げた速球の何球がストライクかだ。要はその確率を増やせば良い、スピードは落とさなくて良いんだ。」

5球目は145km/hを出したが高目に浮き惜しくもボール、ストライクのMAXスピードは柴田が勝っていたが、ストライクのスピード加算カウントは織田が高かった。残念ながらこの勝負は主将織田の勝ちとなった。

勝者織田はなんとかエースを守ったが、柴田の実力を認めざるを得ないと思っていた。そして、口には出さないが清工の真のエースは柴田だと認識した。一方敗者柴田は純粋に悔しがり、主将の巧みな投球に感心していた。

勝負に部員全員が立ち会う事で結果に納得でき、異論も生じない。これによりチームの信頼関係や実力差の理解が深まるのだ。これが清工野球部の方針であった。

監督「柴田、お前が3年生になった時が楽しみだ。150km/hのストライクを連続している姿が想像できるぞ。」

柴田「ウッス！！ ありがとうございます！！」

この後県大会出場の選手が正式に発表され、正規の背番号が与えられた。1年生からは2名が選出された。

監督「11番 柴田。」

柴田「ウッス！（よし、二番手投手だ。）」

監督「15番 木下。しっかり走りこんどけ、ケガすんなよ。」

木下「ウッス。」

県大会まで2週間、正式背番号も決定しトーナメントも発表されている。あとは最終調整だ。柴田は練習後帰宅電車で揺られながら、今はライバルでかつての球友にメールしていた。

清工柴田「(背番号)11番獲ったぞ。」

大阪MT学園 丹羽「清工は部員数が少ないし、ザコばかり楽勝じゃねーか。おめでとう、俺はなんとか3軍昇格だ。」

青森桑大付属 前田「おめでとう補欠君、俺は(背番号)9番、一桁だぜ。」

メールを読んだ柴田は車窓から外の景色を観ながら考えていた。

「丹羽程の実力があっても3軍か、やっぱスゲーなMTは。俺がMTなら3軍のまま卒業かも、丹羽頑張ってるな。前田の野郎天狗になりやがって、甲子園で対戦したら3球三振にしてやるからな。」

毎度の事ながら柴田は電車の中で寝てしまった。

「柴田君、終点だよ。」

「あ、ウッス。ありがとうございます。」

「そろそろ県大会だね。どう、番号貰えた？」

「ウッス、11番っす。」

「おおー、良い番号だね、柴田君ピッチャーだったんだね。頑張れよ。11番」

「ウッス！！」

日本各地において(全国高校野球)甲子園を夢見る熱い戦い(県予選)が始まろうとしている。

闘いの舞台

いよいよ甲子園出場権を賭けた地区予選(都道府県別)が始まった。

柴田の所属する清工(兵庫県大会)は、1回戦を先発のエース織田がピシヤリと相手打線を封じ込め2-0で勝ち。

2回戦はスーパールーキー柴田が先発し味方打線の援護もあって試合を優位に進めていたが、終盤ランナーを許し一打出れば逆転のピンチに追い込まれる。そこで、エース織田がキッチリ抑えてなんとか5-4で逃げ切った。

続く3回戦はマネージャー松平による敵チームのデータ解析がバッチリの中、清工には珍しい4-0の大差で勝利した。

そして4回戦 先発柴田で7回までリードを許していたが、エース織田が救援する。打線は8回に同点に追い付き、9回裏代打1年生木下の2ベースヒットでサヨナラ勝ち。清工は安定した2,3年生と多少の不安があるが勢いのある1年生、そしてマネージャーの頭脳でトントン拍子に勝ち進んでいった。

監督「さあ、5回戦だ。これまではワシの見事な采配のおかげでここまで来れた。しかし、ここからは敵は強豪チームばかりだ。実力の差が嫌という程でるからな、今まで以上にシメてかかれよ。」

「ウッス！」

監督「今日の先発は柴田で行く、織田は7回辺りから投げられるように準備しておけ。それと木下、今日はお前がスタメンだ。いいな？」

木下「ウッス。」

5回戦 清工対私立神鍋大付属第三高校の試合 相手は甲子園優勝経験のある名門 今大会のシード校である。

監督「いいか、神三高はまともに戦って勝てる相手ではない。真っ向勝負は避ける、姑息な戦法でジリジリと攻め敵が油断した隙を一気に突くんだ。」

「う、うーっす。」

何とも弱気な監督の発言にチームは意気消沈、しかし冷静に考えれば監督の言う通りであった。神三高は先発柴田の直球を狙っていたが、直球はボールにしカーブでストライクを取りに行く作戦に出た。これに神三高は戸惑い自慢の重量打線も鳴りを潜め、ヒットは打つがタイムリーには至らず得点できずに回が進んでいった。これに対し清工打線は、これまでノーヒットであったが5回の攻撃にチャンスがやってきた。ノーアウト1塁で打者は木下、前試合でサヨナラヒットを打った実績を買われてのスタメン抜擢だった。

木下「よーし、ここは確実に送りバントだな。」

敵投手が投球動作に入る前からバントの構えを見せる木下に監督は声を荒だてた。

監督「木下！打て！バントはするな！！」

普通、作戦は敵チームに判らないようにするのだが、清工監督はブロックサインどころか大声で打者に指示を出したのである。それは、敵チームの野手だけでなく敵ベンチにもはっきりと聞こえていた。

神三高ベンチでは

「むっ、大胆な指示だな。ナメてるのか？それともワザと聞こえるように指示して裏をかく気か？」

打者木下「何で？ここはバントだろ、しかし監督の指示だし、かく乱作戦かも？」

監督「打てと言ってるんだ！」

戸惑う木下に敵投手は初球ボールになるカーブで様子を見ると、木下はバットを振らずに見送った。そして2球目投球モーションと同時にランナースタート、木下は直球をライト前へと打ち返し、1塁ランナーは2塁を蹴って3塁へスライディング、清工はノーアウト1塁3塁とチャンスを広げた。ヒットエンドラン成功であった。

清工ベンチでは

柴田「おっし！木下。さすがテクニシャン。さあ、次は手堅くスクイズで先制ですね。」

監督「いやヒッティングあるのみ、押せ押せ。」

柴田「監督、練習試合の自分の時と言い今回と言い、なぜバントしないんですか？」

監督「何だお前知らんのか？ウチの野球を。」

柴田「と言いますと？」

監督「ウチはな、セーフティーバント(自分も生きようとするバント)は構わんが、犠牲バント(始めから自分が犠牲になろうというバント)は禁じ手なんだ。」

柴田「禁じ手の理由は？」

監督「ウチでは野球さえ人より秀でていれば、他はどうでも良いという考えは全くない。あくまで野球を通じて人生の勉強をするという考えだ。勝てば良いというのではなく、野球から社会を生きていく知恵を学ぶのだ。」

柴田「人生の勉強と犠牲バントとどういう関係があるのですか？」

監督「人生にスクイズは無いぞ。自分が死んで他人を生かそうなんて、現実社会でまず無いだろう。」

柴田「そ、そうですが。」

監督「所変われば品変わる。主権者が変われば方針も変わるんだ。柴田が中学でやってきた野球が間違いだとは言わんが、清工では清工の野球がある、これも間違いだとは思っとらん。」

柴田「判りました。」

続く打者はセンターへのフライでアウト、3塁ランナーがタッチアップで還った。結果的に犠牲フライで清工が1点先制したのだが、後続打者が凡退しこの回の清工の攻撃は1点に止まった。その後試合は互いに譲らず無得点のまま進み1-0清工リードで9回表神三高の攻撃である。この回得点できなければ清工の勝利だ。マウンドには先発から好投を続ける柴田がいた、織田の救援は未だ必要としていなかった。

柴田「よーし、あと3人で完封勝利だ。エースの助け無しで俺一人で投げ抜いてやる。」

清工ベンチでは

松平「柴田君かなり疲れが出てるわね。大丈夫かしら。」

織田「監督、自分ならいつでも投げられますので。」

監督「うむ、柴田はそろそろ限界だ。ランナーが2塁に進塁したら織田に交代させる。」

松平「その前に一発(ホームランを)浴びない(打たれない)ことを願います。」

一方神三高ベンチでは

「貴っ様らー！あんな弱小チーム相手にいつまで遊んどる気だー！しかも相手ピー(投手)は1年だぞ、情けない。この回で最後だぞ、ウチは全国制覇するんじゃないのか？何としてもひっくり返せ！」

「おおっ！！」

この回の先頭打者を絶対に出すまいと気負った柴田は、コントロールが定まらず四球でランナー1塁、続く打者は手堅く(犠牲バントで1塁ランナーを2塁に)送って、1アウト2塁で1打同点のピンチを迎えた。

ここで神三高は代打を送った、あきらめの代打ではなく起死回生の代打である。代打者は大柄で当たれば飛びそうな体格、しかも気合いの入った面構え、かなりの威圧感が清工を襲う。

清工ベンチでは

監督「神三高め勝負に出たか、ヨシ投手交代だ織田、後は頼んだぞ。」

織田「ウッス！」

柴田がベンチに下がり、エース織田がマウンドに登り投球練習を開始した。

松平「柴田君お疲れ、ナイスピッチングよ。」

柴田「ウッス。後少しだったんすけど。」

監督「後は主将を信じろ。柴田良くやったぞ、想像以上だ。」

柴田「ウッス！主将頼むぜ。」

松平「主将なら大丈夫よ、疲れて握力の落ちた速球投手より、全く疲れていない変化球投手の方が有利よ。」

監督「奴(代打者)は直球には強いが変化球に弱い、それに足も遅いしな。」

松平「そうよ、速球投手対策で出してきた打者は変化球投手に手も足も出ないわ。」

柴田「ふうー、もう勝ったようなもんですね。」

清工ベンチはエース投入で勝負を決めたかのような余裕、それに対し神三高ベンチでは

「やっとエースが出てきたか、計算通りだ。代打だからと思ってナメるなよ。」

「そうそう、下手だから補欠になってる訳じゃない、確実に一発があるから代打にしてるんだ。」

「織田のデータならウチも知っているさ、織田得意のスライダーをスタンドまでかっ飛ばせ。」

織田の投じた初球はカーブでストライク、2球目は外角低めのボール球の直球、3球目は打者の胸元へ食い込むボールの直球で ボールカウント1ストライク2ボールとなった。

神三高ベンチでは

「さあ次は来るぞ、お待ちかねのスライダーが。」

「かっ飛ばせー！！」

清工織田が投じた球はストライクコースで縦に沈むスライダー、代打者は待ってましたと言わんばかりにフルスイング。打球は左中間へと伸びて行き外野フェンスに直撃、ボールはグラウンドへと跳ね返された。2塁ランナーは余裕でホームイン同点に追い付き、足の遅い代打者でも2塁まで到達した。

この瞬間、9回途中まで苦労して好投した柴田の勝利投手の権利が消滅した。

織田「くそ！スライダーを狙ってやがったのか。」

神三高ベンチでは

「ナイスバッティング！さすがウチの切り札だ。」

「くそ、おいしい！もう少しでホームランだったのに。」

この試合、もう勝利したものと勝手に思い込んでいて同点に追い付かれた清工ベンチでは

柴田「ああっ！主将のスライダーが！」（くそ！俺の勝利を消しやがって！！）

監督「むう、あんなに簡単に狙い打ちされるとは。」

松平「敵がウチをどこまでデータ解析しているかは把握できませんでした。」

監督「いや、松平君は責められない。敵を褒めるべきだ。それよりこの後、神三高はどうであるかだな。」

松平「次からはクリンナップ(打順3~5番打者)です。」

クリンナップ:打者がヒットを打つ事でランナーを還し塁上にランナーが居なくなることから塁上をクリンナップ(掃除)するという意味でクリンナップと言われる。また、チームの強打者がこの打順に位置し、攻撃側としてはチャンスであるが、守る清工サイドとしては大ピンチである。

捕手で副将の林がタイムをかけ、マウンドに内野手を集めた。

林「すまん織田、俺のリードが読まれていた。」

織田「いや、俺の方こそ非力だった。まさかフェンスまで飛ばされるとはな。」

内野手「それより後を無得点に抑えよう、未だ逆転された訳じゃない。」

林「その通り織田、打たせて取ろうぜ、バック(野手)を信頼しろ。」

織田「ああ、そうするよ。」

マウンドで林達が話をしている間清工ベンチでは

柴田「1アウト2塁か、ここは歩かせて(わざと四球にして打者を1塁に進塁させる)4番と勝負ですかね？」

松平「それじゃ、1アウト1,2塁で打者は4番余計ピンチになるじゃない。」

柴田「え、でも内野は守りやすくなりますよ、ゲッツー(内野手によるダブルプレー、2アウトをまとめて取る)だって取りやすくなる。」

監督「ピンチだろうがチャンスだろうが勝負だ。歩かせる事はしない。」

マウンドにいた内野手達が各守備位置に戻り試合再開、織田が投球動作に入る前から3番打者は既

にバントの構えをした。

清工ベンチでは

松平「どうやら2アウトになってもランナーを3塁に進めたいらしいわね。そして4番に期待か。」

柴田「ランナー3塁になるのは、相手が何番打者でも投手としては嫌ですね。」

清工1塁3塁手はバントに備えて前進守備、織田の投球と同時に打者へ向かってダッシュをしてきた。打者は投球がボールと判断しバットを引っ込めた。判定はボールで、この時1塁3塁手は打者の目の前までダッシュしてきていた。そして、打者ににらみを利かせて守備位置に戻った。2球目も打者はバントの構え、投球動作と同時に1塁3塁手がダッシュ、しかし打者はすぐさまバットを立ててスイングした。打球は前進守備の1塁手の横を飛び抜けて、ライト前へと転がるかというところで二塁手が横っ飛びでキャッチ、すぐさま起き上がり1塁へ送球して打者はアウト。その間に2塁ランナーは3塁へ進塁し、2アウト3塁で打者は4番という場面になった。

清工ベンチでは

監督「ヨシ、ナイスセカン(2塁手)。」

柴田「あっぶねー、バスター(バントすると見せかけてヒッティングに切り替える作戦)で来やがったか。」

松平「結果的に送りバントした事と同じ状況になったけど、投手心理としてはどう思う？」

柴田「そりゃバスターの方が嫌ですよ、外野まで打球が抜ければ1点(失点)ですからね。」

監督「ウチがバントしないのも、敵チームにしてみれば嫌かもしれんぞ。」

柴田「なるほど、そういう考えもありますね。」

松平「絶対確実な作戦など無いのよ。」

監督「作戦は敵との騙し合いだ。」

さて場面は1-1同点の9回表神三高の攻撃、2アウトランナー3塁1打(ヒット)出れば勝ち越しの場面で打者は4番である。ボールが2球続いた後のスライダーを狙い澄ました打者はフルスイング、打球はレフト方向へ大きく打ち上げられたがファウルでスタンドに入った。そして4球目打者のタイミングを外すチェンジアップを打ち返した。打球はセンターへの大きな当たりでセンター(外野手)が高く上がった打球を追いかけながらフェンス方向に走る。

清工ベンチでは松平が目を閉じ手を合わせて祈っていた。他の部員たちもボールを取ることを願っていた。一方神三高ベンチでは、抜けるだのホームランだの騒いでいた。

そして、センターがフェンス直前でホーム側を振り向き大きくグラブを掲げてボールをキャッチした。これで3アウトになり神三高の攻撃終了、いよいよクライマックス1-1同点で9回裏清工の攻

撃である。

清工ベンチでは

監督「よし、上手く守った！上出来だ。」

織田「さあ反撃だ！この回で決めるぞ。」

選手「おおっ！！」

この回の先頭打者は9番打者の木下。地味な選手ではあるが練習熱心で守備が上手く、長打力は無いがボールをバットに当てるのが上手い。そして動揺することなくチャンスで期待に応えるので、背番号15(控え選手登録)ではあるが1年生ながらこの試合スタメン出場している。

左打席の木下は初球、体を1塁方向へ進めながらバットを横に差出しボールをコンッとバットに当ててグラウンドへ転がした、セーフティーバントであった。ボールは3塁方向へ転がり3塁手がボールに飛びかかってくる。木下は拝むように上半身を屈めて1塁めがけて疾走する。空気抵抗を減らし少しでも速く走る為だ。

3塁手から矢のような送球が思い切り体を伸ばした1塁手のグラブに収まった時、既に木下は1塁ベースを蹴った後だった。記録は3塁への内野安打(ヒット)である。

木下「セーフティーなら叱られないだろう。」

清工ベンチでは

柴田「ナイスバント木下！」

松平「木下君素敵よ！」

織田「ナイスラン！」

監督「次走れ」小声

続く1番打者は初球からフルスイングで投手にプレスをかける。2球目は見送ってボールになり、3球目の投球動作に入った瞬間木下は2塁へと走った。打者は振り遅れ気味の空振り(ランナーを援護する為故意に)、捕手から2塁に素早い動作でボールが投げられたがスライディングした木下の足が一瞬速く盗塁成功。ノーアウト2塁で1打サヨナラのチャンスになった。

2ストライク1ボールで1番打者に続けざま投じた4球目は、フルスイングではなくライト方向を狙ったいわゆる右打者の流し打ち、結果はセカンドが上手くボール(ゴロ)に追い付き打者はアウトだが2塁ランナーは3塁へと進塁した。

これで1アウトランナー3塁、清工サヨナラのチャンスで神三高絶体絶命の大ピンチとなった。

神三高ベンチでは

監督「清工は今まで(過去の試合で)スクイズをしたことがない。だからウチはスクイズ警戒しないと、その裏をかいてスクイズをしてくるはず。」

スクイズ:ノーアウト又は1アウト時に、投球動作とほぼ同時に3塁ランナーがスタートし打者はバントする、ボールが転がっている間にランナーがホームイン打者は1塁送球によりアウトになる犠牲バントによる得点である。

清工ベンチでは

柴田「(ここは当然スクイズと思うけど)ここでもヒッティングですよね？」

監督「当然だ。」

松平「外野(犠牲)フライでも(タッチアップで)サヨナラね。」

通常ランナーがいるベース(1塁または3塁)にはランナーのリードを抑制するため内野手がベッタリとその塁に付くのだが、神三高は3塁ランナーを無視し、極端な前進守備を取った。内野手だけでなく、外野手までもがダイヤモンド(各塁ベース)の近くまで来ている。内野ゴロまたは浅い外野ゴロやフライの間に3塁ランナーが還るのを防ぐ為だ。

守る神三高にしてみれば、1点でも失うとサヨナラ負け、絶対に3塁ランナーを還したくないのだ。つまり浅いゴロやフライなら失点を許さないが、外野手の上を越されたらおしまいという一か八かの作戦に出た。

後続の2番打者は通常なら1,2塁間を抜けたライト前ヒットのはずが前進守備のライトゴロでアウト。これには3塁ランナーも還れず3塁ベースに釘付けとなった。

ここで場面は2アウト3塁打者は3番の副将林である。

清工ベンチでは

織田「林！フルスイングだ！！」

柴田「副将！場外までかっ飛ばせ！！」

2ストライク2ボールから投球動作に入るや3塁ランナーはスタート、甘く入った直球を林は見逃さなかった、持ち前のシャープなスイングで打球は3遊間を抜けてレフト前へ転がった。前進守備のレフトは素早くボールを取り渾身の力を込めて捕手へ送球し、ホームベースをブロックする捕手の正面に良いボールが返された。

3塁ランナー木下は捕手をかわし回り込んでのヘッドスライディング、僅かな差であったが木下の手が早くホームベースにタッチしホームイン。清工サヨナラ勝ちとなった。

清工ベンチは歓喜の大騒ぎ、一方神三高は啞然とした表情、対照的な幕切れである。

試合後清工チームは

監督「よーし、良い試合だった。明日はいよいよ準々決勝だ、今日はゆっくり休んで明日に備えとけ。」

織田「とうとうベスト8に来た。ここまで来たら絶対甲子園に行くぞ！」

選手「おおっ！！」

例によって帰宅電車の中で柴田は、今日の試合の内容について彼女にメールを送ると、彼女からは良かったねという返信がすぐ来た。正直柴田は嬉しいのだが、何か物足りなさを覚える今日この頃であった。

「柴田君、終点だよ。」

「ウッス、ありがとうございます。」

「今日試合だったろ？どうだった？」

「勝ちました、明日準々決勝っす！」

「おお、すげーな。明日も頑張れよ！11番。」

「ウッス！！」

熱い夏

清工は16年ぶり2回目の県大会準々決勝に進出した。対戦相手は今大会(県)優勝候補No.1の私立西海大学付属明石高である。この高校も名門で過去2度甲子園優勝を経験しており、野球部員数は110名でプロ選手も過去10名輩出し大学野球界でも全国大会常連の付属高校である。

監督「よし今日の先発はエース織田で行く。木下お前は今日1番(打者)で行くからな。」

織田「それから今日の相手は手強いぞ、優勝候補No.1だ。」

松平「西海のオーダーが発表されています。先発は1年生の明智、どうやらエースは温存しておく様ですね。」

柴田「なに！1年生だと。くそ、西海の奴らナメやがって！」

木下「メッタ打ちにしてマウンドから引きずり降ろしましょう。」

自分達の昨日までの事を棚に上げ、いけしゃあしゃあと上等な口を叩く清工チームであった。しかも相手は優勝候補No.1、西海高にしてみれば今日はラッキー高に当たったようなもの。試合前から余裕であった。

「いやー今日は良い調整日みたいなモンだな。」

「全く、しかし清工がよくベスト8に残ったな、意外つか。」

「昨日は神三高相手に良い試合したみたいだけど、ま今年の神三高は外れ年だしな。」

「清工快進撃も今日までだな。」

エース「おい明智、今日は俺投げねえからなお前独りでキッチリシメろよ。」

明智「安心して任せてください。」

優勝候補No.1と言われすっかり天狗になっている西海高は、言いたい放題にボロクソ言っていた。

そして試合が始まり、1回表清工の攻撃は明智のカーブにカスリもせず3者連続三振で終了し、明智をメッタ打ちにするどころか自分たちがギリギリ舞いになる始末で口程にもない初回であった。

清工ベンチでは

柴田「木下、あのカーブそんなスゲーのか？」

木下「うーん、なんつか、直球なのかカーブなのか予測できねーんだよ。」

林「打者の手元でそれが判るんだ。でもその時じゃ遅い。」

織田「直球はそれ程速いとは思わんが、カーブとの球速差が大きいようだな。」

松平「クセのある投手だとボールが投手の手から離れる前に投げ方で(変化球か直球かが)判るんだけど、明智の場合同じフォームで投げってくるからフォームじゃ球種が判断できないのね。判るのは投げた後、変化球を待っていて速球が来れば間に合わないし、速球に山を張って変化球が来ればタイミングを外される。」

柴田「なんて嫌な投手なんだ！(くそ、羨ましい。俺にはできない。)」

監督「がははっは！」

直球とカーブの速度差が大きく投げるまで球種が判らない西海1年明智に対し、カーブ、スライダー、チェンジアップと変化球の種類が多い清工エース織田、共に変化球投手の先発で始まり試合は投手戦となった。

6回を終了し先攻の清工はノーヒットの上ランナーを一人も出せない、いわゆるパーフェクトに抑えられていた。後攻の西海は毎回ランナーを出すのが堅い清工の守りに阻まれ得点には至らなかった。

そして7回表清工は1番打者木下からの攻撃である。

木下「今日3度めの打席だ、だんだん明智の球が見えてきたぞ。」

木下は明智のカーブに上手くタイミングを合わせセンター前に打ち返した。この試合清工の初ヒットである。

清工ベンチでは

柴田「いいぞ、木下！ナイスバッチ(バッティング)。」

松平「こういうケースでは一般的に送りバントですが、ウチでは言うまでもなく、、」

監督「ヒッティング有るのみ！」

織田「打て！打て！」

西海ベンチは

「どうせ清工の事だ、ここは盗塁か(ヒット)エンドランだろう。」

「牽制で釘付けにしろ。」

守る西海投手明智は1塁ランナーの木下に対しかなり警戒をしていた。2球3球と1塁へ牽制球を投げ、少しでも木下のリードを縮めようとしていた。しかし木下はリードを縮めるところか少しづつ伸ばしていき、牽制球には動じない姿勢をアピールした。

柴田「いいぞ木下、もっと(牽制球を)投げさせろ！」

松平「明智はかなり木下君の足が気になるようね。」

監督「ぐふふ、計算通りだ。」

明智は1塁へ4球牽制球を投げた後、ようやく打者へ初球の投球動作に入った。その瞬間1塁ランナー木下がスタート、遊撃手(ショート)が2塁へのベースカバーに入る、打球はガラ空きの3遊間真ん中を抜けてレフト前へと転がった。これでノーアウト1,2塁清工先制のチャンスになった。

清工ベンチでは

柴田「ナイスラン！ナイスバッチ！」

松平「さあ、打順はクリンナップに入ります。チャンスですね。」

監督「イケイケドンドン。」

柴田「あの一、ウチのチームにバントのサインはあるんでしょうか？」

監督「そんなもん、初めから無い！」

柴田「やっぱり。」

続く3番林は4球目をフルスイングするも明智の球威に押され、打球はレフトへ打ち上げられたが浅いフライの為2塁ランナーは動けず。打者林はレフトフライに倒れ1アウト1,2塁で打者は4番織田。

織田は初球から積極的にフルスイング、1,2塁間を破るライト前ヒットで2塁ランナーがホームイン、清工1点先制である。そして尚も1アウト1,2塁で5番打者を迎える。

清工がイケイケムードで波に乗り始めた時、西海高がそうはさせじと動いた。投手交代エースの登場である。

清工ベンチでは

柴田「あっ、遂にエース今川が出てきた。」

監督「思ったより早いな、未だ1失点だし明智のスタミナならまだ2,3回は投げられるはず。」

松平「西海は2点目を取られるのが嫌なのよ。ウチにはエースの後に速球派投手の柴田君が控えているものね。」

柴田「そおっすよね！自分が後に控えてたら得点しにくいし、これ以上の失点は避けたいっすよね！」

監督「見る、今川が出てきた途端に騒がしくなったぞ。」

今川を目当てに来たファンが騒ぎ出し、スピードガンを持った中年男性たちが慌ただしく計測やビデオ撮影の準備を始めた。

今大会(県)優勝候補No.1チーム西海高のエース今川(3年)は150km/h近い直球と鋭く曲がるスライダー、そして大きく沈むカーブを武器としていた。当然今大会屈指の投手であり、プロ、社会人、

大学関係のスカウトが注目する選手である。何しろ西海高は昨年の県代表高として甲子園に出場しており、3回戦で敗れたものの3試合すべて今川一人で投げ抜いたのである。西海高及び今川にとって今年は甲子園での雪辱戦、県大会で負けるわけにはいかなかったのだ。その今川がマウンドで投球練習を始めた。

清工ベンチ

柴田「今川の直球は、えげつない速さですね。ボールを受ける捕手は手が痛いだろうな。」

松平「おそらく柴田君が今まで目の当たりにした事が無い投手だと思うわ。」

柴田「プロの試合以外で、こんな速い直球見たことがありません。」

監督「今川を打ち崩せばウチが注目されるぞ。」

柴田「・・・」(俺が監督なら絶対送りバントだな)

5番打者は今川が投球動作に入る前からバントの構えを見せた。これに清工ベンチは反論せず、黙認状態であった。

西海高ベンチでは

「バントすると見せかけて、、か。バスター警戒しろ。」

「神三高戦で上手く行ったからってウチには通用せんぜ、作戦見え見えだ。」

5番打者は期待とは裏腹にショート(遊撃手)ゴロのダブルプレー(6-4-3)で清工7回表の攻撃は終わった。

そして7回裏西海高は、この試合7回表まで2桁背番号を付けた選手(補欠)が明智を含め4人がスタメン出場であったが、代打攻勢で2桁⇒1桁にスイッチしていった。代打に出た1桁の打球は2桁とは比べ物ならない速さで内外野手の間を抜けていく。レギュラーが揃った西海高は清工さながらの連打で得点を重ね、7回裏の攻撃を終わってみれば一挙4点を奪い取った。

7回裏の守りを終え清工ナインがベンチに戻ってくると、皆肩を落とし無言で下を向いていた。

清工ベンチ

松平「お疲れ皆、さあ反撃よ！」

監督「奴らは取られたら直ぐ取り返すんだ。ウチも取り返せ！」

「おお！！」

8回表清工の攻撃中に柴田がベンチ横の投球練習場でピッチングを始め、ベンチでは監督とエースの織田が話を始めた。

監督「お前はウチのエースだ、また3年生でもあるしこの大会が最後になる。どれだけ点差が開こ

うが最後までお前で行くぞ。」

織田「情けは無用です、自分が辛くなるだけです。いつでも柴田に代われます。」

監督「最後の大会にエースが打ち崩され1年生に代わる、本当にそれで良いのか？」

柴田「うちでは一番速いストライクを投げる奴がエース。今の柴田のピッチングを見ても柴田が自分より速いと思います。」

監督「判った。」

織田はタオルで顔を覆い悔しい表情を他の者に見せないようにしていた。マネージャーの松平はそっと横目で織田の心境を察し、エースとしてのプライドを傷付けまいとして言葉は掛けなかった。

西海高エース今川のピッチングに清工打線は沈黙、8回表の攻撃は3者連続三振で終わった。そして、8回裏のマウンドには柴田が立った。

柴田「ヤロー、よくもうちの主将をメッタ打ちにしやがって。お前ら残り全員連続三振にしてやるぜ。」

普段以上に気合いの入った柴田はいつもとは別人の様にコントロールが定まり、直球のキレも良くコースもストライクゾーンの隅を突く素晴らしいピッチング、これにはさすがの西海高もバットには当たるがヒットを打てなかった。

西海高ベンチでは

「奴が1年の柴田か、結構良いボールを投げるじゃねえか。」

「初めから(柴田を)出してりゃ良いのに。」

清工ベンチでは

監督「む、速いな。(柴田は)バージョンUPしたのか？」

松平「エースが打たれて、自分がやらねばという思いに目覚めたのではないのでしょうか？」

織田「何だ、俺は柴田の前座か？」

8回裏西海高の攻撃は3者凡退に終わり、1-4西海高3点リードの9回表清工最後の攻撃となった。

織田「お前ら！諦めんじゃねえぞ！食らいついて行け！」

「おおっ！！」

清工打線は相手チームが優勝候補No.1だとか、投手がプロも注目するスター選手などという事は忘れて向かっていった。何も考えず唯無心で且つ純粹にボールだけを見て、打ち返そうとして

いた。2アウトになり、あと一人でゲームセットというところで意地を見せた、センター前ヒットである。

しかし、次の打者がアウトで試合終了。清工織田達3年生の高校野球が幕を閉じた。

試合終了後、着替えを済ませ球場を出た所で清工チームが集結していた。

主将織田「みんな、すまない！俺が非力だった。」

副将林「いや、織田だけのせいじゃない、俺(捕手)のリードも単調で読まれていたんだ。それに打線も明智を攻略できずにいた、もっと早く打ち崩せていたら。」

松平「彼らの実力は春季大会よりUPしていました。ウチの実力を考えれば誰も責められないかと。」

監督「お前達、今大会優勝候補No.1高を相手に良くやった。持っている力を全部出したと思う、負けの責任は全てワシにある。お前たちは胸を張って帰るんだ、決して下を向くな、いいな！」
「ウッス！！」

清工が気を取り戻した頃、対戦相手の西海高が出てきた。清工達には目を合わせず、勝って当然という涼しい顔でさっそうと球場を後にした。その時清工1年生の二人は心の中でリベンジを誓った。

柴田「お前ら覚えてろ、次(対戦したら)絶対勝つからな。」

木下「今回は今川に負けたんだ、明智はどうってこと無い、来年は俺達が勝つ。」

柴田は帰宅電車の中でずっと考えていた、あの時こうしていれば勝てかも。いつもなら寝ている電車だが今日は興奮して眠れなかった、彼女にメールを送信することも忘れて試合を振り返っていた。

「お柴田君、珍しいね起きてるなんて試合どうだった？」

「見事に負けました。」

「そっか残念だったね、でも相手は西海高だろ？最後まで戦って立派だよ。西海高は今年も県代表になると思う。お疲れさん、さあ秋季大会に向けて明日から頑張ろう！」

「ウッス！」

3年生の夢は終わっても1年生の夢は始まったばかり、泣いてなんかいられない。

織田が引退する明日からは、自分がエースなんだという自覚を決意した柴田であった。

夢の一休み

清工が県大会準々決勝で敗れた翌日、清工グラウンドでは3年生が引退の挨拶をして新主将が選ばれる。そして来年の夏に向けて新たな挑戦が始まろうとしていた。

織田「それでは次期主将に黒田を推薦するが皆の意見はどうだ？」

「異議ありません。」

松平「マネージャーは竹中さん一人になっちゃうけど、これからも頑張ってね。」

竹中「はい、松平先輩には及びませんが頑張ります。」

「私が引退しても困った事があれば遠慮なく相談してね。また、ちょくちょく様子見に来るから。」

「はい、ありがとうございます。」

その頃全国各地で代表校が決定しており、残す代表校はあと3校だけとなっていた。柴田のライバル前田は青森の桑大付属高で1桁(レギュラー)を取り、順当に勝ち進んでいったのだが決勝で惜しくも敗れ涙を飲んだ。

数日後大阪府の決勝戦で勝利したMT学園が甲子園出場を決め、全ての代表校が決定した。そのMT学園に所属するもう一人のライバル丹羽は3軍選手でありベンチにも入れず、甲子園ではスタンドから自校を応援することになる。

各代表校が白熱した試合を繰り広げている甲子園大会が真っ盛り、盆の3日間は清工野球部も練習が休みである。そこで柴田は彼女と久々のデート。普段柴田は練習熱心で帰宅方向も彼女とは反対方向である為、二人が一緒に過ごす時間があまり無くメールや電話でのやりとりがほとんどであった。

映画館の前で

「どの映画にしようかな？」

「今流行りの長編アニメが良いな。」

「ドエズネーのフルCGアニメだろ？それにしよう。」

「これ見たかったんだー。」

二人がシアターの入り口で並んで待っていると。前の上映が終わり客がぞろぞろと出てきた。

「結構人が多いね。」

「盆休みだから社会人も多いのね。」

「あっ！」

「えっ？何があったの？」

並んで待つ柴田の前に現れたのは見覚えのあるカップルであった。

「お柴田じゃねーか、今日は練習休みか？」

「ウッス、主将それに松平先輩。盆休みは毎年の事でしょ知ってるクセに、それより主将と松平先輩はそういう関係だったんですか？」

「うん、まーねー。あら、この子が柴田君の彼女？カワイイじゃない。」

「こ、こんにちは。」

「うむ、想像以上だ。柴田には勿体ない全然釣り合わんぞ。」

「そ、そんな事はないです。」

「映画結構面白かったわよ、楽しんでらっしゃい。」

「はい、ありがとうございます。」

「柴田、暗闇に紛れてエッチな事するなよ。」

「し、しませんよ！」

柴田と彼女はシアターの中で空いている席に座った。二人で映画に行くのは初めてで、二人はなんだか落ち着かない様子。上映前シアターのライトが消され周囲が暗くなると、柴田の視線に振り返った彼女は固まった。

「あれ、どうしたの？俺の顔何か変？」

「す、凄く色が黒いのね。目の白い部分と歯しか見えないよ。」

「日焼けで色が黒いのは判るけど、そんな漫画みたいになる訳ないじゃん。」

「本当だって、目つぶって口閉じたら透明人間。」

「でも、手のひらは普通だよ。ほら白い。」

「本当だ。」

柴田がスッと手のひらを見せると、彼女はやさしく柴田の手を握った。

「あっ」

「どうしたの？」

「いや、その俺こういうの初めてで、、」

「ふふ、いつも野球の事ばかり考えてるんだから、今日ぐらいは野球を忘れて私の事を考えてね。あ、そろそろ映画始まるわ。」

映画を観ている間二人は手を握ったり、肩を寄せ合ったりと良いムードで時は流れて行った。

映画館を出てランチタイム

「面白かったわねー。」

「うん、CGならではの大迫力だったよ。松平先輩の言う通りだった。」

「松平先輩ってキレイな人ね。」

「それに頭も良くて野球部の頭脳だったんだ、引退されると困るんだな。」

「ふーん。」

柴田が松平の事を褒めると彼女は口数が少なくなった。それに気付かず柴田はポンポンと松平を褒めちぎる。ついさっき、「今日は私の事を考えて」と言われたにも関わらず他の女の事をペラペラしゃべる鈍感球児であった。

食事を終えてショッピングモールを見て歩く二人、手を繋いで歩くものの何故か彼女のテンションは下降気味。

夕暮れ黄昏時にベンチに座ると柴田はようやく気まずい雰囲気気がついた。

「あの、何か怒ってる？」

「ううん別に。」

「俺、何か気に触るような事言ったかな？」

「うーん少しね。でも気にしないで、悪気が無いって事は知ってるから。」

「あ、ごめん。俺今まで女の子と付き合った事無くて、それで何を話せば良いとか何処行けば良いとかどう振る舞えば良いか判らないんだ。」

「私も男の子と付き合うのは初めてだよ。女の子は恋愛物のドラマ小説漫画とかよく観たり読んだりしてるから振る舞いが判るの。」

「俺も恋の勉強しとかなないと駄目だな。」

「うん、そっちの方も頑張ってるね。」

「うん、今度女の子の事について松平先輩に聞いてみるよ。色々教えて貰わないと駄目だな。」

彼女はスッと立ち上がり、下を向いたまま2,3歩いて止まった。

二人のムードがどんより曇った天気から晴れ間が見えてきた、そんな回復の兆しであったにも関わらず柴田は自ら墓穴を掘ってしまった。ムードは一変強い風が吹き、土砂降りの嵐となった。

「あ、今のまずかった?(やばい、怒ってるぞ、どうする?)」

「本当に判らないの？」

「うん、ごめん。俺女の子の事知らなくて、どうしたら良いか判らないんだ。それを人に聞くのも駄目なんだ？」

「違うの松平先輩に聞いて欲しくないの、女の子の事は私が教えてあげるから、他の女には聞かないで。」

「うん、約束する。他の女には聞かない。」

「それと、男の子の事は柴田君が私に教えてね。」

「よ喜んで！」

彼女は柴田の胸に頭を付けると柴田は彼女をそっと抱き締め、彼女が顔を上げ目を閉じると柴田は一瞬戸惑いながらも口づけをした。互いに唇の感触を確かめた後二人は黙ったまま少しの間見つめ合い、そして顔を赤らめ恥ずかしそうに下を向いた。

柴田は彼女を家の近くの駅まで送った後、何やらぼーっとした様子で怪しい笑みを浮かべながら帰宅電車で揺られていた。

「アレがキスか、女の子の唇って柔らかいんだな。」

柴田のライバル前田は親元から遠く離れた見知らぬ地で寮生活をし、盆正月も親元に帰れない野球漬の毎日。しかも高校が男子高であり、女子と会話する機会もなかった。

もう一人のライバル丹羽も地元とは言え寮生活で野球漬の生活、幸い男女共学なのでチャンスはあるが彼女はいなかった。

そんなライバルの辛さも知らない柴田は走り始めた恋に想いを募らせ、降車した駅近くの本屋で彼女推奨の恋愛小説を買った。柴田は野球以外の本を買うのは初めてで、恥ずかしそうにしていた。買ったばかりの恋愛小説を大事に鞆に入れ、何やら爆弾でも入っているかのようにドキドキワクワク。

「これは恋のテキスト、勉強しないと。」

チームワーク

清工野球部は盆休みが終わると秋季(県)大会に向けて練習を始めていた。3年生が引退、新主将黒田が指揮し1,2年生による新体制でのスタートだ。

翌年春に開催される選抜高校野球大会も開催球場が甲子園であり、この大会に出場するには文字通り選抜される必要がある。選抜されるには秋季大会や近畿大会(秋季大会の上位校が参加)で好成績を残す事が必須条件となる。

黒田新主将「秋季大会は来月だ、時間は少ないぞ。気合い入れとけよ！」

「ウッス！」

練習の合間の休憩時間には竹中(マネージャー)がスマホで甲子園(全国)大会の速報を調べていた。

竹中「あ、兵庫代表の西海大付属高が準決勝で負けたわ。」

柴田「マジッすか？」

竹中「うん、0-1で静岡代表の徳田学院に完封負け。」

木下「0-1か、良い試合してますね。」

竹中「うん、西海はヒットは打つんだけど後一本(ヒット)が出なくて無得点で、エース今川は野手のタイムリーエラーで失点して負けちゃったみたい。」

柴田「味方のエラーで、今川悔しいだろうな。」

木下「でも、今川ならドラフト指名されるだろうな。」

黒田「俺もそう思う、もし指名が無くても大学や実業団からオファーがあるさ。」

竹中「これで決勝は静岡の徳田学院と大阪のMT学園に決まったわね。さあ、どっちが優勝するのかしら。」

黒田「MTだろうな、なんたって選手層の厚さが違うよ。他高じゃエース級の投手やクリンナップが2軍3軍にゴロゴロいるんだぜ。」

木下「1軍の補欠だって、他県の代表校ではクリンナップ打てる実力らしい。」

竹中「そういう噂ね。事実とは限らないけど。」

柴田「へえ、(丹羽、お前そんな凄い所でよく頑張れるな、尊敬するぜ。)」

竹中「時間です、休憩終わり。さあ練習！」

「ウッス！」

3年生が抜けた秋季大会は1,2年生の戦い、織田を含むクリンナップが抜けた清工は大幅な戦力ダウンとなりベスト8どころか3回戦負けとなった。

監督「むう、何しろ長打が打てん、来年は強打者を特推せねば。」

竹中「打力向上に筋トレメニューを増やしてパワーUPも必要ですね。」

黒田「しばらくは大きな(甲子園が掛った)大会は無いな、みっちり鍛えていくか。」

監督「お前達、この秋から来年春までは死ぬ程練習だぞ、嫌なら退部しろ。」

「ウッス！」

清工野球部が強化練習を開始して3ヶ月 12月のある寒い日、前主将の織田と監督が生徒指導室で話をしていた。

「やはり大学へは進学せんのか？」

「はい、両親と相談したのですが学費が出せないと言われました。」

「そうか、惜しいが仕方ないな。」

「大学の学費は払えないという事は高校入学する時から親から言われてましたし覚悟はできています。それに自分は大学からオファーが来るような実力ではない事も自覚しています。」

「判った、では卒業後の進路希望は？」

「就職希望です、社会人野球部がある企業に就職できれば光栄です。」

「うむ、じゃワシの知ってる企業で2,3社あたってみる。」

「よろしくお願いします。」

「それと話は変わるが後輩達をどう思う？」

「主将の黒田は部員達を引っ張ってくれると思います。それにマネージャーの竹中は今まで松平の影で目立ちませんでしたが、これからは良い仕事をしてくれるでしょう。何しろ頭が良いし野球を良く知っている。」

「うむ、竹中君は小学校時代は男子に混ざってリトルリーグのレギュラーだったからな。中学ではソフトボール部の主将、ウチに来てからはソフト部が無いので野球部のマネージャーをやってくれている。」

「知識は松平以上かと思います。それより気になるのは1年の柴田と木下ですね。」

「そうなんだ、柴田は性格上カットとして投球が乱れ自滅するか、別人の様にナイスピッチングか

の両極端だ。」

「木下は良く伸びてきたと思います。自分は木下を一番期待しており、次期主将候補かと。」

「うむ、あとは決定打を打てるスラッガーが居ればな。」

「これから監督は来年入学の特推者探しですね？」

「ああ、良い後輩(中学3年の)が居たら教えてくれ。」

「はい、リサーチしてみます。」

監督と織田が進路相談をしている間、グラウンドでは何やら騒動が起こっていた。騒動の原因はチームが勝てないのは投手のせいだとか打線が悪いだとかの責任転嫁であった。

木下「柴田は乱調すぎてエースに向かねえんだよ。守ってても不安で仕方ねえ！」

柴田「自分が打てない事を棚に上げて試合に勝てない事を投手のせいにするんじゃねえ！投手が0点に抑えたって味方が得点できなけりゃ勝てっこ無いって。」

「そうか、じゃお前一人で投げて打って試合を決めてこいよ。俺たちはベンチで寝てるからな。」

「ああ上等だ、誰の助けも要らねえ俺一人で勝ってやらあ。」

竹中「もういい加減にしなよ二人とも！」

木下「コイツが先に因縁付けて来たんだ！」

柴田「嘘付け！お前だろうが。」

黒田「貴様ら、やめんか！」

主将黒田のパンチが木下と柴田の頬に炸裂すると、さすがの木下と柴田も下を向き動きが止まった。

黒田「木下、ウチのエースは柴田だ。文句があるならお前がエースに挑戦してみろ。」

木下「あ、いえ、エースは柴田です。」

黒田「柴田、お前は想像以上に馬鹿だな、一人で野球ができるか！頭を冷やせ！」

柴田「ウッス。」

黒田「竹中、すまんがコイツらの傷の手当てをしてやってくれ。」

竹中「判りました。」

木下「自分はいっす、水道で流してきます。」

木下は竹中に治療はして貰いたい、柴田の近くにいるくらいなら水道水で洗い流した方がマシ
と思い、その場から足早に去って行った。

黒田「柴田お前、木下とは仲が良かったのに、いつから不仲になったんだ？」

柴田「知らねえっす！」

竹中「もしかして、柴田君に彼女が居るのを妬んでるのかもね。」

柴田「そうなんすか？」

竹中「なんとなく女のカン。だって、そういう年頃だしね。」

黒田「竹中が言うなら間違いない！」

柴田「あの馬鹿野郎、そんな事で。」

竹中「彼女がいる柴田君には判らないわ、木下君の気持ちが。」

柴田「うーす」

グラウンドから離れた水飲み場で木下は一人顔を洗っていると、そこへ一人の女子生徒が近づい
てきた。

「あら木下君じゃない、休憩？それともサボリ？」

「俺が練習サボるか！」

「どうしたの？唇切れてるよ。」

「何でも無いよ。」

「打球を取り損ねたんでしょ？」

「違う、主将に殴られたんだよ。」

「うわー、ヘビーだね男子運動部は。」

「女子テニス部はどうなんだ？キャプテンから体罰はないのか？」

「女子の場合、体罰は無いけど陰険なイジメがあるのよ。」

白いテニスウェアを着た女子は辛そうな目で木下を見つめると、その眼差しに木下は胸が締め付
けられるような想いがした。

「先輩にイジメられたのか？」

「ちょっとね、でもよく有る話だよ、どうってこと無いの。」

下を向いたテニス少女は前髪で零れ落ちる涙を隠した。

「随分辛そうだな。話して解決する訳じゃ無いけど、話して気が少しでも晴れるなら話してみなよ。」

「ふーん、何かいつもの木下君とは違うね。」

「そ、そうか？俺は普通通りだけど。」

この女子は木下とは同じ中学の同級生であり、互いに面識があったが特別な間柄では無かった。しかし思春期を迎え、女子に興味はあるものの練習一筋の木下にとって、目の前にいるテニスウェア女子のファッションが気になって仕方ない。何やらモジモジとする木下に、テニス少女の涙はいつしか乾いていた。

「ね木下君、確か彼女いなかったよね？」

「悪かったな、彼女なんていねーよ。」

「じゃ薬つけてあげるよ。」

「あっ！」

テニス少女は木下の切れた唇にそっと口づけをした。

「ふっファーストキスっていう薬だよ、良く効くんだから明日にはもう治ってるよ。」

「あの、念の為に、もう一回！」

「何言ってるの、一生に一度のファーストキスだから効くのよ。もう薬は無いわ。」

「じゃ、一生に一度のセカンドキスと！二度と無いサードキス！それと最初で最後のフォー、、」

「ぷっ！あはははっ。おっかしい、野球部って皆そうなの？」

「な、なんだよ！まさか俺をからかったのか？」

木下が怒鳴るとテニス少女は真剣な眼差しに変わった。

「私ね、中学の頃からずっと木下君が好きだったの。でも木下君野球ばかりで私の事なんて全然見向きもしてくれなかった。」

「きょっ今日からは心を入れ替えます！良ければ僕と付き合ってください。」

「うん、よろしくね。(急に随分変わったわね。キスで男子のスイッチが入ったのかな?)」

しばらくして木下がグラウンドに戻ってきた。フラフラとした足取りで顔を赤らめニヤけた様子で。

竹中「木下君だわ、顔も赤いし何かぼーっとしてる。」

柴田「主将の鉄拳がまだ効いてるんじゃないですか？」

黒田「いや、そんな筈はない、かなり手加減したし。」

柴田「アレで？相当効きましたけど。」

木下「ウッス、ご迷惑をお掛けしました。これから気合い入れて頑張ります。」

竹中「柴田君も何か言う事あるでしょ？」

柴田「ウッス、チームの和を乱して済みませんでした。以後気を付けます。」

黒田「よし！練習再開だ。」

「ウッス！！」

黒田のリーダーシップと竹中のサポートでチームは練習に戻った。練習再開直後は固いムードであったが木下が大きく声を出し表情にも真剣さが増し動きも活発であり、他の部員達も木下に引っ張られるように活発に動き出した。そしてその木下の変化を竹中は見逃さなかった。

竹中「ほほ～木下君までもか、やるわね～今年の1年生は。」

黒田「何のことだ？何をやったんだ木下は？」

竹中「恋をしたみたいね僅か10分足らずの間に、まったく節操が無いんだから。」

黒田「えっ？いや、その俺はそんな趣味は無いぞ。やっぱり女子の方が好きだし。それに俺には心に決めた子が、、」

竹中「何を訳の判らない事を言ってるのよ。木下君が水飲み場に行ってる10分間に誰かと何かアクションがあって恋をしたんじゃないかって言ってるの。」

黒田「うむ、そうだと思った。(俺、馬鹿みたいじゃんか。)」

練習後黒田は木下を呼び寄せ、水飲み場で何があったかを聞きだした。

黒田「そうかラッキーだったな、しかしウチでは男女交際が禁じ手なのは知ってるな？」

木下「はあ、でも例外もあると聞いてますが。」

竹中「例外とは柴田君の事ね、そう彼は性格上交際禁止にした方が良いプレーができるから例外的に黙認してるの。でも木下君は例外じゃなく、堂々と交際して良いわよ。」

木下「えっ？そうなんすか？でも何で？」

黒田「男女交際をして実力以上の成績を残す者は恋愛推奨だが、意識しすぎて実力以下の成績になる者は控えた方が良いという考えだ。前者が木下で後者が柴田だ、判るな？」

木下「じゃ、コソコソしないでいいんですね？」

黒田「ああ、お前らの自由だ、堂々と付き合え。」

木下「ウッス！」

竹中「但し部活中はあんまり派手に振る舞わないでね、他の部員の目も有るんだから。判るでしょ？この意味。」

木下「ウッス、十分判ります。振る舞いには気を付けます。」

その後木下は1年生達から同様に聞きだしを食らった。

木下「かくかくしかじか。」

「なにい！まさに棚からぼた餅、そんな旨い話が本当にあるのか！？」

「なんて羨ましいんだ、許せん！」

柴田「つまり話を整理するとだ、木下は殴られた痛みと悔しさで頭に血が上り、それを抑える為に水飲み場で頭を冷やしていた。すると偶然通り掛った白いポロシャツに白いミニスカートの女の子に悩殺され、放心状態のスキに唇を奪われた。木下はその瞬間意識がぶっ飛び初めての恋に落ちた、そして口づけのお代わりを求める木下に母性本能をくすぐられたテニス女子はタイミング良く告白、女子に無知な木下は迷うことなく交際を申し込み、二人は僅か10分足らずの間に恋人同士になったという話だな。」

1年生達「なるほど～、具体的で良く判った。いいなー木下。」

木下「・・・」

帰宅電車の中で柴田は木下の事を考えていた。

「木下の野郎、正直嬉しいだろうな。俺には良く判る。」

今まで柴田は木下とは野球の話になると盛り上がるのだがプライベートの話(特に異性の事)は一切

しなかった。双方共に多少なりとも気を使っていたのだ。しかし、これからは互いに恋の悩み相談や自慢話ができる、そう思うと何やら嬉しくも頼もしくも思えるようになってきた。以降、柴田と木下には固い信頼関係が生まれた。これは清工野球部にとっても大きな財産となっていく。

二度目の春

中学時代の球友と甲子園での再会(対戦)を誓い、それぞれ別々の高校へ進学した柴田、前田、丹羽の3人だが1年目の再会は叶わなかった。そして高校2年目の春、3人共二度目の挑戦が始まっていた。(青森県)私立桑原大学附属高校の前田は1年生の夏に一桁(レギュラー)を取ったものの、県大会決勝で敗れ甲子園へは届かなかった。そして秋季大会では準決勝で敗れて、センバツ甲子園(春の選抜高校野球全国大会)への出場もできなかった。

4月桑原高グラウンドでは入学式後の一般入学選手も加わり、夏の大会に向けて練習に熱が入っていた。そんなある日、主将が前田を呼び寄せ何やら話をしている。

主将「去年ウチは(夏の県大会)決勝で悔しい涙を流した。こんな思いはもうしたくない、今年は必ず優勝して甲子園に行くんだ。」

前田「同感です、絶対に優勝しましょう。」

「で、お前が1年の指導をやれ、緩んだ奴がいたら遠慮なくシメろ。ナメた奴にはシバキだ。いいな？」

「判りました。ビシバシ鍛えてやります。」

「但し無意味な体罰はするなよ、単なる下級生イジメになったりして問題になるからな。」

「気を付けます。」

「それと、1年の石田には気を付けろ、奴は要注意人物だ。」

「あのデカイ奴ですね、どんな奴なんですか？」

「野球の事しか考えない自己中な奴らしい、また中学ではキレて暴力事件も何回か起こしている。」

「そんな奴よく特推しましたね？ウチの学校はどんな基準で特推選手を選んでいるんでしょうね。」

「どんな馬鹿であろうが学業成績は一切問わない。素行に関して言えば多少の問題を起こしても学校側が握り潰す。要は野球で好成績を残せば良いのだ。」

「すごい基準ですね、今時そんな基準が公表されているなんてのも珍しい。」

「馬鹿野郎、そんな基準が大ぴらにできるか！内密の話だ、他言するなよ。」

「判りました。(そうだったのか、学業成績の悪い俺が選ばれた理由が判った。)」

桑原高野球部には今年も特推、一般合わせて30人が入部し、この内25人が他県からの入学である。

主将から要注意人物のレッテルを貼られた石田は奈良県出身で、昨年の中学野球全国大会では準決勝で敗れたもののバッティングに関しては超中学級と言われており、身長185cm体重78kgの立派な体格で、高校では即戦力になるだろうと期待されていた。

石田は練習もまじめに行い野球センスも良く、結果も出すので監督からは認められ同級生からはリーダーとして信頼されていた。しかし、先輩に対する態度が悪く上級生からは嫌われていた。

グラウンドでバッティング練習をする石田に前田が声を掛けた。

前田「石田、調子良いようだな。」

石田は前田に振り向きもせず、言葉も返さず完全無視であった。

前田「コラ石田！聞いているのか！」

石田「うるせーな、練習の邪魔すんなよ。」

前田「貴様、何だその態度は！ナメてるのかっ！」

前田は石田の近くに駆け寄り、投手に投げるのを止めさせた。

石田「何すんだよ、アンタに何の権限があって投球を中止できるんだ？」

前田「お前のナメた態度を注意しているんだ。練習以前の問題だ。」

「ここは野球グラウンド、野球をやる場所だろ？態度なんか関係ねえ、野球が上手けりゃ良いんだよ。数ヶ月先に生まれたからって威張るんじゃねーよ。」

「大した自信だがお前一人で野球をやる訳じゃない、チームプレーにはチームの和があるんだ。」

「知るか！監督、この先輩が言いがかりを付けてきて練習できません。」

「な、なんだと！ふざけるな！」

監督「前田ちょっと来い、石田は練習を続けろ。」

前田「自分は悪く無いっす、奴のナメた態度を注意したんです。」

監督「判っている、お前は正しい、しかし無駄な事だ。」

主将「奴は入学早々寮でも上級生とトラブルを起こしているんだ。中学でも手が付けられなかったらしい。」

前田「その話は聞いた事があります、じゃ尚更シメとかないと。」

監督「奴は口で言っても無駄だ、手を上げると反撃してきて大喧嘩になるぞ。」

主将「乱闘事件になればマスコミに騒がれてやっかいな事になる。」

前田「じゃ、どうしろと？黙って見逃すんですか？」

監督「後でワシから注意しておく、今は辛抱してくれ。」

主将「悔しいのは前田だけじゃない、俺も他の上級生皆そうだ。」

前田「判りました。」

前田は悔しい気持ちを抑えて練習を続けたが、心中では抑えきれなかった。

「くそっ、何で先輩が辛抱する必要があるんだ、話がおかしいじゃねえか。去年の俺達なんざ、先輩からのイジメや体罰という偽名の暴力で毎日泣かされてたんだぞ、それが何で今年の1年に通用しないんだ。去年の俺達は一体何だったんだよ。」

前田は去年入学式前から入寮し野球部の練習に参加していた。そこではまず先輩のパシリから始まり、教訓という偽名の意味不明の教育指導(いじり)、筋トレとは名ばかりの徹底した訓練、そして逆らえば殴られるという生活だった。これはこの寮にとって毎年の事であり特に異質扱いはされず、学校側も社会勉強として黙認してきた。

特推で入学してきた生徒は部活を辞めれば即退学扱いとなる、まして他県から特推で来た生徒は帰りたくても帰れない、なんとも逃げ場の無い立場にあった。このうっぶん晴らしに下級生へのイジメがあり、これを伝統のように毎年繰り返す事態が続いていた。

何しろこの高校は全国各地の二流スター選手が流れて集まる場所、真面目に地方から甲子園を目指す者も居れば既に腐っている選手もいる、この一部の腐った選手層が不必要な下級生イジメをしていたのである。

その夜、野球部寮のリビングルームでは10人位が集まりTVのスポーツニュースを観ていた。

「お、センバツの決勝はMT学園が勝ったぞ。」

「MTは夏春連覇か、すごい選手層だな。」

「俺達もこの夏(県大会で)優勝して甲子園へ行こうぜ。」

「ああ、ウチがMTに勝って全国制覇だな。」

木下(丹羽お前は大した野郎だぜ、全国屈指の高校(MT学園)で頑張ってるんだからな。多分上級生からのイジメや下級生からの突き上げなんか、ウチよりもっとヘビーなんだろうな。それに引き換え清工の柴田は彼女を作ってヘラヘラ軟派な青春してやがる。負けたくねえ、絶対に柴田なんかには負けたくねえ。)

5月になり1年生の石田は3年生の投げるボールも遠くへ打ち返すようになっていた、特に自分の好きなコースに来れば打球は外野フェンスを越えて隣の池に飛び込むこともしばしばあった。守備の方も安定しており1年生にしてレギュラーは確実と誰もが思っていた。そして石田の実力は前田も認めざるを得なかった。

6月2年生の何人かが練習についていけずに脱落していくのを尻目に、石田は悠々と練習をこなし他の選手よりも秀でている事をイヤミったらしくアピールしていた。

7月になりグラウンドで県大会の選手が監督から発表された。

「1番ライト前田・・・4番サード石田・・・」

石田の名前が4番で出た事に部員達は騒然とした。レギュラー確定とは思っていたがせいぜい6～8番で、まさかクリンナップしかも4番とは誰も想像していなかった。

「まさか1年で4番とはな。」

「そうだな今年の4番は主将だと思ってたよ、石田は最高でも3番か6番だと予想していたけど。」
木下(これじゃ、石田が益々天狗になるぜクソっ)

石田は光栄ですとか信じられません等と言う訳もなく、当然という態度であった。それどころか先輩達にイヤミを言う始末であった。

石田「前田先輩、1番なんだから絶対出塁してくれよ～。前の打者が出塁しないと俺の打点が減るからな。」

前田「ああ、出て(出塁して)やるぜ、お前こそちゃんと(タイムリーヒットを打ってランナーを)還せよ。」

なんとも雰囲気の良いレギュラーメンバーであった。そして、レギュラーに選ばれなかった3年生にとっては事実上この日が引退となる。正式な選手引退までは練習や試合のサポートに回され、陽を浴びる事は無いのだ。面白くない気持ちを抑えて応援やサポートに徹する者もいれば、腐って部に顔を出さない者もいる。

多種多様な地域から人が集まるという事は、いろんな個性が集まるという事になる。レギュラーに選ばれなかった3年生の中で納得がいかない選手も少なくはなかった。

夢の切符

夏の甲子園(全国大会)への出場権をかけた県大会が始まった。青森県大会昨年準優勝の私立桑原大学附属高校はシード校として2回戦からの出場となる。対戦相手が比較的弱いチームなので試合前から余裕の桑原高であった。

監督「今年はラッキーなことに初戦は楽勝だな。コールドで決めるから初回からガンガン行けよ。」

「おおっ！」

桑原高は主力を温存することなくレギュラーをスタメンに起用し、5回でのコールド勝ちを狙っていた。

5回コールド勝利:後攻の桑原高が4回までに点差を10点以上付けて5回表の敵の攻撃を0点に抑えれば、5回裏の攻撃をせずとも桑原高の勝利となる。

1回表を3者連続三振、その裏桑原高の攻撃は1番前田からである。

石田「先輩、出てくれよー。俺の打点に響くから。」

前田「うるせえ！黙って見てろ。(あのヤローとことんナメやがって)」

前田は怒り心頭、4球目の甘いカーブをフルスイングで打ち返した。打球はレフト方向へグンッと伸びてスタンドへ飛び込む先頭打者ホームランとなった。

ホームインした前田を歓喜で迎える桑原高ベンチでは

「ナイスバッチ！前田！」

「しびれるねー、先頭打者ホームランかよ！」

前田「石田悪いなランナーとしてベースに残れなくて、お前の打点を減らしちまったよ。」

石田「いえ、ナイスバッチ。(くそ、見てろよ。)」

2番打者はセンター前ヒット、3番打者はヒットエンドラン成功(1塁ランナーは3塁まで進塁)で、ノーアウト1塁3塁打席には4番石田を迎えた。

石田は臆する事無く4番らしい堂々たる態度で打席に立ち、3球目の直球を打ち返した。打球はライトフェンス直撃走者一掃のタイムリー2ベースヒットで2点追加、後続の打者も追い打ちを掛ける。1回裏を終わってみれば打者9人で計5点を挙げた。

前田はホームランを打ったが打点は1点、石田は2ベースヒットだが打点は2点、両者共譲らぬ初回となった。

2回以降も攻撃の手を緩めない桑原高は、4回裏終了時に計12点を叩き出した。それに対し相手チームは桑原高エースの投球に翻弄されノーヒット0点であった。この回(5回表)3点以上を取らなければコールド負けとなる。

もはや相手チームに闘志は無く、早く終わってくれと望む絶望感さえ感じられた。結局最終回もノーヒットで終わり、12-0の桑原高5回コールド勝利となった。

監督「うむ、計算通りだ、よくやった。」

主将「じゃ早く帰って練習だ。」

「おおっ！」

波に乗る桑原高はトントン拍子に準決勝まで駒を進めていったが、準決勝の相手は去年(夏)の決勝で敗れた高校である。

監督「2,3年生は覚えているな？去年の悔しい思いを、奴らに負けて甲子園を逃したんだ。」

主将「お互い勝ち進めばいずれ対戦することになる相手だ、1試合でも早く潰しておいた方が良い。」

前田「今年の戦力はウチの方が優勢です、絶対に勝てます。」

試合は一進一退で進み8回表終了時点で1-1の同点、その裏桑原高の攻撃は1番前田からの好打順である。

前田は疲れの見える敵エースのボールを選んで四球で進塁、2番打者はキッチリ犠牲バントで送って、1アウトランナー2塁、打順はこれからクリンナップへと続く桑原高のチャンスである。しかし敵チームの捕手は立ち上がり、打者のバットが届かない位置でミットを構えた。敬遠である。(勝負せずにわざと四球にして、空いている1塁を埋める)

桑原高ベンチでは

主将「おっ！(3番を歩かせて4番の)石田と勝負か。」

監督「ほほー、面白くなってきたぞ。」

2塁ベース上の前田は

「知らんぞー、ウチの4番をナメたら怖いぞー。」

打席に向かう石田は

「ナメやがって、(3番を歩かせた事を)後悔させてやるぜ。」

名門桑原高で1年生ながらレギュラーしかも4番を任された石田は、今まで自分が敬遠されて次の

打者と勝負というケースは多々あったが、前の打者が敬遠されて自分と勝負という事は石田の野球人生の中で初めてのことであった。

石田の闘志は最高潮に達し、相手投手を震え上がらせる位であった。そして、桑原高ベンチでは石田のバットに期待を寄せて最悪でも1点、願わくば3ランホームラン(3点)を望んでいた。

前田「石田、お前は生意気で礼儀知らずで大馬鹿だが、お前なら期待できる。贅沢は言わん、外野まで転がせば俺は還る。(ホームインする。) なにっ!？」

なんと3番に続き4番の石田までにも捕手は立ちあがった。

主将「連続敬遠だと?1アウト満塁になるぞ!」

監督「がっはっはっは!今日ノーヒットの5番と勝負か。やるじゃねえか。」

石田「フンッ、腰抜けどもめ。」

満塁になるという事は守備側にとって大きなリスクである。1ヒットで2点を失うし長打が出れば3点、ホームランなら4点を失う危険性がある。

しかしリスクだけではないメリットもある、どこの塁でもフォースアウトにできるし、ダブルプレーで一気に攻撃終了の可能性もある。

相手チームはそんなリスクを背負ってでも、今日ノーヒットの5番との勝負が得策と考えたのだ。

監督「よーし、こっちも仕掛けるか。代打佐久間!」

主将「佐久間はボールをバットに当てる技術はチームNo.1、どんなボールにでも食らいつく。面白くなってきたぞ。」

監督「まったくだ、ははは、と言うよりお前次(の打者)だろ、さっさとネクスト(次の打者が待機するエリア)に行かんか!」

主将「おお!」

1アウト満塁で代打佐久間、内外野共に前進守備、1点も失いたく無いが外野手の上を越えれば大量失点は覚悟という考えだ。佐久間は初球の直球をフルスイングするも空振り、声を張り上げ悔しがる、余程得意なコースに来たボールを空振りしたかのように思えた。

そして2球目の投球動作に入るや3人のランナーが一斉にスタート、佐久間はサッとバントの構えをした。

「スクイズだ!」

1,3塁手が打者にダッシュで駆け寄るが、打球はダッシュしてきた3塁手の横へ速い球足で転が

った。なんとか打球に飛びついた3塁手は、ホームは間に合わないと諦め1塁へ送球した。1塁はアウト、しかしその送球の間に2塁ランナーが3塁を蹴ってホームへ突進していた。

「バックホームだ！！」

1塁手から捕手へと好返球であったが、2塁ランナーが捕手のタッチを上手く潜り抜けセーフ、桑原高2ランスクイズで2点を挙げた。

「ナイスバント佐久間！」

「ナイスラン副将！」

1点も失いたくない場面で一挙2点を奪われた相手チームは、堪らず2番手投手にスイッチ。2アウト2塁で打者は6番の主将であったが2番手投手に3球三振、とんだビッグマウスに終わった主将であった。

監督「さあ、最後の(9回表の)守備だ、しっかり守ってこい！」

「おお！」

最後の守備は3者凡退、3-1で桑原高の勝ちで去年の雪辱を晴らした。

そして、決勝戦は延長12回裏4番石田のサヨナラヒットで桑原高が優勝し、甲子園への切符を獲得した。

青森県私立桑原大学付属高校野球部は3年ぶり12回目の甲子園出場を決めたことで、高校周辺だけでなく近隣の駅や商店街も桑原高の甲子園出場を祝っていた。

野球部員の約8割が他県からの出身で親兄弟親戚もほとんど高校の近くにいなかった。これでは応援する人数が少なすぎるという事で、近隣の中年世代が高校での親代わりにと有志が集まり応援団が結成された。

そして桑原高はスポーツで有名な男子高、応援に花を添える女子生徒が居ないのだ。そこで、桑原高から5km程離れた場所にある私立女子高に友情応援を依頼する事になった。

主将「じゃ監督、応援依頼に行ってきます。」

監督「うむ、くれぐれも失礼の無いようにな。丁寧をお願いするんだぞ。」

主将「はい、判っています。」

主将は前田を連れて自転車で女子高まで向かっていた。

前田「主将、俺女子高に行くの初めてなんです。」

主将「お、俺もだ、なんか緊張するな。」

「何しろ女の園ですからね、俺達が普段暮らしている男の園とは全く正反対で行き先がどういう場所が想像できませんね。」

「おう、普段俺達が会話する女は先生か寮のオバサン位で、同世代の女子とは全く接点が無いからな。」

「野球部は応援依頼って毎年してるんですか？」

「いや、全国大会に出場する部だけが許される聖域なので、野球部としては3年ぶりで俺としては初の依頼だ。」

「ところで、何で2年の俺が主将に同行するんですか？普通副将か監督でしょ。」

「知らん、監督がお前を連れてけと言ったんだ。」

「なんか恥ずかしいですよ、何喋れば良いんですか？」

「お前はただ黙って、ニコニコ愛想を浮かべていれば良いというのが監督の指示だ、依頼は俺がする。」

「わ判りました、とにかくヘラヘラしてれば良いんですね、やったこと無いけど頑張ります。」

普段女子に縁遠い男子高の二人は緊張しながら女子高に着いた。守衛で受付を済ませ待つ事5分、

向こうから一人の女子生徒が歩いて近づいて来た。

「しゅっ主将、女子です。」

「そんな事見れば判るわい、ここは女子高だぞ、俺達の方が目立つ。いいか、落ちつけよ。」

「おお、いや、はい。」

女子「桑原高野球部の方ですね？」

主将「おお！いや、はい、くわーら高野球部主将の加藤です。今日は友情応援のおねあい(お願い)に来ました。」

前田(主将、セリフ噛みまくり！)

「あ、バトン部のキャプテンをしています佐々と言います。案内しますので、ご一緒にどうぞ。」

「は、はい。」

バトン部キャプテンの後ろを付いて歩く野球少年二人、女子高が余程珍しいのか何やら周囲をキョロキョロと落ち着かない様子、案内役の女子がいなければ100%不審者である。

そして、他の部活中の女子達が通り過ぎる加藤達をヒソヒソと会話をしながら見ていた。

前田「主将、何故か注目されてます。」

加藤「女子高に坊主頭の男子が2名だからな、珍しいんだよ、きっと。」

佐々「ふっ、全国大会に出場するチームの男子が来るっていう噂を聞いて興味本位で見に来てるの、気を悪くしないで下さいね。」

加藤「はい、大丈夫です。普段女子からの視線に慣れていないもので、少し恥ずかしいですけど。」

前田「俺達きっと品定めされてるんでしょ？」

佐々「ぷっ、いえ、そんな事はないと思います。」

佐々は咄嗟にフォローしたが、前田の勘は的中していた。女子達は当然、今年の全国大会出場クラブはどんな男子かな〜と品定めをしていた。タイプだとかタイプでないとか、有名人の誰かに似ているとか、各女子グループで自由勝手な品評会が開かれていた。

加藤達は女子達の視線を浴びまくり、恥ずかしさを嚙締めながら案内先の会議室に着いた。会議室ではバトン部の顧問と2名の女子生徒が待っていた。

主将「初めまして、桑原大付属高野球部主将の加藤と申します。こちらは2年生の前田です。」

前田「まっ！前田です、初めして(始めまして)。」

佐々「ふふっ、今日のご苦労様です。この度は全国大会出場おめでとうございます。」

前田の緊張状態にクスクスと微笑む女子達であった。

加藤「ありがとうございます。で早速ですが、本高はこの度高校野球の全国大会出場を決めまして、つきましては貴高バトン部ちゃんに応援のお願いを致したく存じましゅ。(しまった、またかんだ)」

前田「よよ、よろしく願いしますっ！」

佐々「概略は顧問から聞いております。桑原高さんとウチはお互いに、全国大会に出場する際は出来る限りの協力をしようというのが古くからの伝統になっています。私達バトン部が桑原高さんの応援で今年甲子園に行けるのを名誉に思います。喜んで応援させていただきます。」

前田「マジッすか！？やったー！」

加藤「前田、取り乱すな！すみません、お恥ずかしい所を。」

佐々「ふふふっ、いえ大丈夫ですよ、前田さんって面白い人ね。」

前田「そ、そーすか？いやー、なんか恥ずかしいっす。」

ぎこちない加藤と前田は友情応援の承諾を得てミッションを達成した。その帰り道の加藤と前田の会話である。

前田「主将！良かったっすね、応援承諾してもらえて。」

加藤「ああ、これでアルプス(甲子園の応援スタンド)が華やかに盛り上がるぞ。」

「楽しみっすね！」

「お前、アルプスの応援に見とれてエラーとか三振すんなよ！」

「当然っすよ、気合い入り過ぎてプロ並みのプレーするかも知れないっすねー。」

「前田、お前いつもと全然違うな、余程女子に応援してもらうのが嬉しいんだな？」

「しゅ主将だって、いつも冷静沈着なのに緊張しまくりでしたよ。」

「そ、そりゃそうだろ。」

「佐々さん、カワイかったですね〜。」

「前田、お前佐々さんに惚れたな？」

「なな何言ってるんすか！普段女子と会話できないから珍しいだけですよ。」

顔を赤く染めテレ隠しに遠くを見る前田であった。

その日以降も全国各地で次々と県代表校が決まって行き、兵庫の柴田が所属する清工は準々決勝で敗退、全国で最後に代表校が決定した大阪は丹羽の所属するMT学園であったが、丹羽は2軍選手である為甲子園のベンチにも入れず今年もアルプスからの応援になる。

その夜、消灯後の寮の自室で前田は窓の外を見ながら心の中で叫んだ。

「柴田、丹羽、お前達と甲子園で再会(対戦)出来ないのは寂しいが悪く思うな、お前達の方まで甲子園で野球してくるからな。それと、俺には天使が応援してくれるんだぞ、ざまーみろ。」

友情応援の女子高は桑原高を応援すると約束したのだが、舞い上がった前田は何故か佐々が自分だけを応援してくれると大きな勘違いをしていた。

「(県大会で)優勝できて良かった。」

もはや、甲子園優勝とか将来プロ野球選手とかの前田の夢は、佐々一人に塗り替えられていたのである。

翌々日甲子園大会へ向けて猛練習が行われていた桑原高グラウンドは活気に満ち、選手達は甲子園出場の誇りと女子から応援してもらえるとというドキドキワクワク感で良い刺激になっていた。しかし、昼過ぎにしかめっ面の監督と肩をガックリと落とし下を向いたままの主将がトボトボとグラウンドに近づいてきた。

監督「おい、みんな！大事な話がある、至急会議室まで来てくれ、全員だ。」

「お、おお。」

練習中の選手達は訳が判らぬまま会議室に集まり、監督や主将の表情から良い話ではない事は想像できた。

監督「あー、その甲子園での試合に向けて練習をやっている時になんだが、実は皆に悲しい知らせがある。」

会議室は凍りついたようにシーンと静まり返り、選手は微動だにしなかった。下を向いて肩を震わせる主将を除いては。

監督「今回の全国大会(甲子園)は辞退する事に決まった。」

「ええっ？そんな馬鹿な、俺達(県大会で)優勝したんですよ。何故ですか！？」

「本高野球部員が他高の生徒と乱闘事件を起こして逮捕されてな、その事がマスコミで報道され
明るみになったんだ。校長と話をして高野連から処罰を受ける前に、潔く出場辞退した方が今後
の為になるのではと・・・」

「い、一体誰がそんな事件を起こしたんですか？」

「今は名前を出せないが、乱闘だけじゃなく飲酒や喫煙もしていて証拠の写真も残っている。こ
うなれば、学校側としては見逃す事はできんのだ。」

「そ、そんな、やっと掴んだ甲子園が・・・」

ショックで泣き崩れる選手もいれば、怒りで罵声を監督に浴びせる選手もいた。

主将「黙れ！！静かにせんか！」

「・・・」

主将「俺だって悔しいんだ！しかし、監督に言っても仕方ないだろ。憎むなら事件を起こした奴
を憎め。」

「誰だ！？名前を出せ！そいつをぶっ殺してやる！」

「そうだ！名前を出せ、このままじゃ収まりがつかねえ！」

会議室は沈黙から一転騒然となり、監督が立ちあがって涙を流すと選手たちは静まり返った。

監督「お前ら、遊びたい年頃なのに遊ばず、毎日朝から夜までがむしゃらに厳しい練習に耐えて
夢を追いかけてきた。そして、やっと掴んだ夢の舞台が一瞬にして消えたんだ。お前達の悔しい
気持ち、ワシには痛い程よく判るぞ。しかし、こうなってはワシの力ではどうにもならんのだ
、スマン本当にスマン。申し訳ない！」

主将「何で監督が謝るんですか！？監督は出場辞退を食い止めようと校長に懇願してくれたじゃ
ないですか。」

監督「ワシはお前達に野球の事しか教えとらんかった、人として成長していく過程でやって良い
事悪い事や礼儀等を教えられんかった、それが今回の事件を起こしてしまったんだ。ワシは指導
者失格だ、スマン！」

会議室は再び沈黙に戻った。聞こえるのは監督、主将、選手達のこらえきれない悔し泣きの声だった
。

数日後事件を起こした野球部員2名は自主退学となり、名前を明かされる事無く夜逃げ同様に寮か
ら去って行き退寮後に事件を起こした部員が明確になった。

悔しくもその日は甲子園大会開会式の日であった。寮のリビングで開会式のTV中継を数人が観ていた。

「本当なら俺達、ああやって開会式で入場行進してたんだよな。」

「ああ、新品のユニフォーム着て県大会の優勝旗を持って、桑原高って書かれたプラカードを持つ女子の後ろを大きく胸張って行進してたんだ。」

「そして、試合では友情応援の女子高バトン部が黄色い歓声で俺達の事を応援してくれたはずなのに。」

「畜生！」

一度はこらえたはずの怒りが込み上げてきたのだ、事件を起こした部員の名前は判った。今からそいつを捕まえてボコボコにしてやろうか、そんな思いが抑えきれないでいた。しかし、実行してしまうと負の連鎖に陥る、同じ事件の繰り返しになるのだ。抑えよう、忘れようとする余計に抑えきれない気持ちになった。TVの前の3年生5人は涙が止まらなかった。

グラウンドでは前田が一人ランニングをしている。2年生の前田には来年ラストチャンスがある、今年は県大会で負けたと思って気落ちを抑える事に決めたのだ。だが、どうしても抑えきれない気持ちが一つあった。

前田「佐々さんはバトン部のキャプテンだから3年生だよな、って事は来年俺達が甲子園出場を決めても佐々さんは卒業している。つまり、佐々さんとはもう会えないんだ。これも失恋になるのかな？未だ恋した事無いのに失恋なのか？たった一度10分程会っただけで恋をして自分が恋をしたことに気付かず、失恋した後に恋してた事に気がついたってことなのか？あーもー、訳判んねー。」

前田はモヤモヤとした気持ちをふっ切る為に走るスピードを上げた。

苦しくて悲しくて空を見上げると、青い空に真っ直ぐ伸びる飛行機雲が前田の目には波のように見えた。

選んだ道

結局夏の甲子園大会は優勝候補のMT学園が準決勝で敗れ、四国の土山商業が3度目の優勝を果たした。

9月、3年生が引退し2年生にとって高校部活に残された時間はあと1年になった。

2年生野球部員にとって甲子園へのチャンスはあと2回、センバツ出場が掛った秋季大会と来年夏の県大会である。

甲子園大会優勝候補と言われて準決勝で敗れた大阪MT学園は、主力だった3年生がゴッソリ抜けて大幅戦力ダウンが噂されたが、2軍3軍にも優秀な選手が沢山控えていた。その中に柴田、前田のライバル丹羽も含まれた居た。

丹羽「長い冬が終わり、ようやく俺にも春の兆しが見えてきたぜ。秋季大会では一桁(レギュラー)取ってやる。」

柴田が所属する兵庫県清田工業高校は、夏の大会では良いとこまで駒を進めるが甲子園への出場権は手にできなかった。また秋季大会も同様にセンバツ選考に掛る近畿大会へは出場できずにいた。

柴田「やっぱ、強豪チームに進学した方が良かったのかな？選手の格が違うよな。今更もう遅いけど。」

今年夏の県大会で優勝し甲子園出場を決めたが、部員の不幸事で出場辞退した青森県桑原大学付属高校は、この悔しさをバネに全国制覇を目標と掲げた。

前田「秋季大会優勝してセンバツ優勝、夏も甲子園優勝で春夏連覇だ。」

中学卒業時に甲子園での対戦を誓いながら未だ果たせていない。三者三様の思いは異なるが、夢の舞台は同じ甲子園であった。

秋季大会、MT学園丹羽は高い打率と広い守備範囲に加え強肩俊足が認められ、レギュラーとなった。

中学チームでは4番を打ち、中学の近畿大会では打点王にも輝いた長打力が売りの丹羽であったが、MT学園に進学してみれば自信を失う現実が待っていた。自分より遠くへ打球を飛ばす選手がゴロゴロいて、丹羽がカスリもしない速球を打ち返すのだ。

丹羽はもがき苦しんだ、このままでいいのか？何か変えるべきなのか？でもどこをどう変えて良いかが判らない。そんな時(2年生の春)3人いるコーチの1人が丹羽にアドバイスを送った。

コーチ「丹羽、長打を捨てて、確実にシングルヒットを打てるようにしてはどうだ？」

丹羽「自分は長打者ではないと？」

「そうだ、お前は守備が上手いがバッティングがネックになっているんだ。お前より身体の大きな選手はチームに何十人もいるし、お前よりパンチ力が有る選手も沢山いる。そんなお前が長打に拘り伸び悩んでるのは惜しいと思う。いっそシャープなバッティングにコンバートして、飛距離よりヒットの数に拘ってはどうだ？」

「でも、それじゃ打者の魅力に欠けレギュラーになれないと思ひまして。」

「お前は足が速いんだし、シングルヒットでもその後盗塁を決めれば、結果的に2ベースヒットと同じじゃないか。」

「えっ？」

「たまに2ベースヒットを打つ守備が普通の選手より、確実にシングルヒットと盗塁で2塁へ進塁する守備の上手い選手をレギュラーに推薦するな、俺なら。」

民間企業出身で教員免許を待たないMT学園OBのコーチは、ざっくばらんに丹羽に提案した。

「俺も現役時代そうだったんだよ、今のお前の気持ちがよく判るぜ。」

「コーチ、判りました。コンバートします。」

丹羽は元々打撃センスはあったのだ、ボールに逆らわず確実にバットに当てる、しかも野手のいないところを狙ってヒットにできる。そして俊足を活かした盗塁、広い守備範囲と強肩。コーチからのアドバイスがきっかけで丹羽は大躍進した。

秋季大会では兵庫の清田工業が惜しくも決勝で涙を呑み、大阪のMT学園も準優勝に終わったが、その後の近畿大会(近畿地方各県優勝,準優勝高が出場)では清工とMTが1回戦で対戦することになった。

試合前、清工とMTが球場入りしていると、15m程離れた距離で柴田と丹羽が互いの存在に気付いた。声は掛けなかったが、心の中で互いに叫び何か熱く込み上げてくるものがあった。

柴田「丹羽しばらくだな、よくもまあMTで一桁(レギュラー)取ったな。あっぱれな根性だぜ。」

丹羽「あの(清工)弱小チームでよく近畿大会に出てこれたな、ま、柴田さえ注意すれば他は取るに足らんぜ。」

MT学園ベンチでは

監督「さあ、近畿(大会)で優勝してセンバツ(甲子園)へ出るぞ！」

「おおっす！」

主将「1回戦からラッキーだな清工なんて、注意する選手なんかいるのか？」

丹羽「うーん、どう探してもいないな。楽勝だよ。(やっと掴んだ一桁だ、この一桁背番号付けて甲子園に行くからな。柴田、悪いが手加減せんぞ。)」

清工ベンチでは

監督「相手は去年夏と今年の春全国連覇した王者MTだ。負けたって恥じる事はない、思い切り暴れてこい！」

「ウッス！」

柴田(もっと前向きな言葉は無いのかよ)

1回表清工の攻撃は三者凡退。その裏MT学園の攻撃1番センター丹羽からである、清工先発はエース柴田。

柴田「中学時代チーム4番で近畿大会打点王丹羽が名門MT学園では1番か、選手層が厚いいてのは辛いねー。ま、直球勝負を避けて変化球でいけば、打ち取れるさ。」

丹羽「今の俺を中学時代の4番とっていたら、泣きを見るゼイモエース！」

柴田の投げた初球の甘いカーブを丹羽は軽くタイミングを合わせて打ち返した、打球は速い球足で3塁手の横に転がった。3塁手がボールに追い付きクイックモーションで1塁に送球したが、丹羽の足が速くセーフ、3塁への内野安打(シングルヒット)となった。

柴田「打ち取ったと思ったが、丹羽め一段と足が速くなってやがる。ま1番打者にすりゃ、そんなモンだろう。」

丹羽「さーて、(2塁を)盗むぜ。」

1塁ランナーの丹羽が大きなリードを取ると柴田はすかさず牽制球を2球,3球と送る。

柴田「ムカツくなー、あの大きなリード、ナメやがって。中学じゃそんな大胆なリードしなかったろうが！」

丹羽「お前の投球動作の癖、変わらんなあ、楽勝だぜ。」

打者への初球に1塁ランナー丹羽は盗塁を試み悠々セーフ、ライバル柴田のプライドを序盤から崩しに掛った。

丹羽「へへっ、これで2ベースヒットと同じだな。」

柴田「クソっ、こっそり進化しやがって、なんて嫌な1番打者だ。」

ライバルの成長を自分勝手な解釈で憎む成長の無い柴田であった。2番打者は柴田の直球をライト前に打ち返し丹羽が生還、柴田は初回僅か3球(打者への投球)で1点を奪われた。

清工ベンチ

監督「むう、さすがは王者MT、いきなり2連打で1点先取か。」

竹中マネージャー「丹羽君は塁に出すとやっかいな選手、ウチとしてはどうしても出したく無かったです。」

私立MT学園はスポーツが盛んな男女共学の高校、センバツ出場の選考が懸かる秋の近畿大会では応援団も球場に来ていた。学ラン姿の勇ましい男子に加え華やかなチアリーダーそして、ブラスバンド部による演奏や一般生徒の声援、それは全国大会さながらの応援であった。

柴田「初回から立派な応援だね、ウチにはそんな応援は無いが負けんぞ。」

柴田の意気込み空しく試合は一方的に進み、終わってみれば6-0でMT学園の勝利となった。清工柴田は悔し涙をこらえきれなかった。

柴田「くそ、全く歯が立たねえ、これが実力差なのか？これが地区と全国区の違いなのか？丹羽、お前はMTに進んで正解だよ、チームが強くないとやっぱり勝ち残れねえ。」

清工は1回戦敗退、センバツ出場の可能性は消えた。MT学園は王者の意地を見せ近畿大会を優勝で飾りセンバツ出場をほぼ確実とした。

青森桑原大付属高は夏の(甲子園出場辞退の)うっぴんを晴らすかのように勝ち上がり、秋季大会で優勝した。

季節は冬になり、青森では雪の影響で室内での練習が続く、丹羽,柴田はめったに積雪が無いので冷たい風の中練習が繰り返される。

清工柴田「甲子園へのチャンスは、これ(来年の夏)で最後になった。ラストチャンスを絶対掴んでやる。」

夢の桜咲く春

3月末、前田の暮らす青森県では雪解け水が川の流れを増やし花が咲き始めていた頃、桑原大付属高はセンバツ出場(東北ブロックから2校選抜される。)を決めていた。

甲子園球場がある兵庫県に向かって出発しようとしている長距離バスの前で、応援団による選手への激励が行われていた。その中には桑原高生以外にも近隣の人達も混ざり、声援を送っている。

主将「皆さん、お見送り本当にありがとうございます。去年は悔しい思いをしましたが、その事は雪溶け水と共に流れて行きました。この春、夢にまで見た甲子園で思い切り野球をしてきます！」

盛大な拍手に見送られ、選手達を乗せたバスが動き始めた時、先日卒業したばかりの前主将加藤が走りながら大声で叫んだ。

加藤「お前ら！俺達に分まで野球してきてくれ、頼んだぞ！」

選手「おお！」

加藤の目から涙が零れ落ち、バスの中の選手はもらい泣きする者や闘志を燃やす者がいた。選手は皆、加藤達3年生の悔しい気持ちを理解できたのだ。

主将「皆、俺達の為、そして先輩達の為にも紫紺(しこん)の優勝旗(注)を青森に持って帰ろうぜ！」

「おお！」

(注)春の選抜大会優勝旗は紫色に近い糸で作られており、そう呼ばれることがある。夏の甲子園大会では赤い糸で作られているので深紅(しんく)の優勝旗と呼ばれることがある。

選手達の言葉に感激した監督や引率の教諭は肩を震わせていた。

バス運転手「良い生徒さん達ですね。私まで涙が零れましたよ。」

監督「いやー、お恥ずかしい、野球しか知らない純粋な子供達です。」

監督は謙遜しつつも嬉しさを隠しきれなかった。

翌々日、センバツ大会開会式当日。全国から選ばれた高校が入場行進する前に集まり、出番を待っている。そこには新聞社や放送関係者その他メディアが今大会の注目選手にインタビューして

いた。その中で桑原高は去年夏の出場辞退があったが、くじけず秋季大会で優勝そして選抜出場がメディアの注目を集めており、桑原高の地元青森の新聞社やTV局が桑原高チームを取材している。

石田「甲子園でもホームランをぜひ打ちたいです。」

主将「去年来れたはずの甲子園に來れなかった先輩達に分まで野球をします。」

記者「素晴らしい、桑原高の躍進を期待しています。次、前田君ちょっと話いいかな？」

前田「あっ、はい大丈夫です。」

記者「前田君確か中学時代のライバルがいて、甲子園での対決を誓った選手が今大会出場しているとか。」

前田「はい、MT学園の丹羽君です。お互い1回戦に勝てば2回戦で対戦します。」

記者「おお～、それは楽しみです。丹羽君とは今大会で会った？」

前田「いえ、中学卒業して以来未だ会ってません。次会う時は甲子園(のグラウンド)でと誓いました。」

記者「ナルホド、良かったら今から丹羽君の所へ一緒に行こうと思ったけど、君達の再会に水を差すような事は止めとくよ。」

前田「あ、ありがとうございます。」

記者「じゃ、明後日の1回戦頑張って下さい。2回戦のMT戦でまた取材させて貰うよ。」

前田「はい、1回戦勝てるよう頑張ります。」

開会式が終わり今日試合の無いチームは球場を出て帰路につく、MT学園(大阪)など球場から近い高校では地元に戻るが、桑原高などの遠路から来ている高校は宿泊施設に返っていった。その日前田と丹羽はお互い姿を見る事はできなかったが、心の中でエールを送っていた。

丹羽「前田、1回戦絶対勝てよ。お前との対戦楽しみだぜ。」

前田「丹羽、センバツ優勝候補のMTでレギュラーか、正直信じられんが嘗ての球友として誇りに思う。絶対1回戦勝って、MTも倒してやるからな。」

1回戦 青森県私立桑原大学附属高校対広島県私立直心義塾高校の対戦

桑原高ベンチでは

監督「いいか、直心は今大会中国四国ブロック代表の中でチーム打率が最も高い、つまり打撃のチームだ。長打力のある打者は少ないが、シングルヒットの連打で相手を打ちのめしてきた高校だ、とにかく勢いづかせるな。」

「おお！」

直心高ベンチでは

監督「桑原は先行逃げ切りタイプだ、先制して少ないリードを守り切る、敵を打ち崩すウチとは正反対だ。いいか、桑原に先制を許すな、ウチが先制して桑原の追い上げをさせずに勝とうじゃないか。」

「ハイッ！！」

どちらも先制点が欲しい中、両エースが好投し5回まで0-0のまま終了した。そして、6回表桑原高の攻撃は4番石田から始まる。

石田「(自分がこの回の)先頭打者か、よし(ホームランを)狙ってやるぜ。」

この打席石田は変化球を主体に投球してくる直心エースに対し、ボールになる変化球を見逃しストライクになるボールをカット(フルスイングではなく、軽くスイングしてバットに当てわざとファールにする)していた。

直心エース「あんの野郎、ファストボール(直球)を狙ってやがるな、面白れえその挑戦受けてやろうじゃねえか。」

直心エースは渾身の力で外角高目に直球を投じたが、石田はジャストミート打球はライトスタンドへ飛び込むホームラン桑原高が1点先制し、1塁側アルプス席の桑原高応援団が歓喜の声援を送った。

石田「よしっ！見たかっ！」

桑原ベンチ

「ナイスバッチ石田！」

「さすが東北の大砲！」

直心ベンチ

「む、ライトフライかと思ったが、意外に伸びたな。」

「1年から4番を打ってきただけの事はありますね、大したモンだ。」

監督「次の回から奴らは逃げに入るぞ、後続を打ち切って追いかけるんだ。」

直真は桑原の後続をキッチリ抑え、6回裏の攻撃に入ったが桑原エースの速球に押されて無得点に終わり、1-0桑原高リードのまま8回表を終了、その裏直心が中国四国ブロック打率トップの意地を見せる。四球,盗塁,送りバントで1アウトランナー3塁、打順がエースのところで代打が送られた

桑原高監督「ここはスクイズ警戒だ。」

前田「四球だけはするなよ。勝負しろ。」

石田「あの(打者の)身体、当たればスタンドまで飛ぶぞ。真っ向勝負は避けるべきだ。」

投手「ちっ、ランナー3塁ってのは嫌な場面だぜ、ボーク、ワイルドピッチ(何れも投手のエラー)でも1点だからな。」

捕手「十中八九スクイズだと思うが、問題は何球目にしてくるかだな。」

攻める側守る側も、敵が何を考えているか判らない状況での作戦である。

投手が投球動作に入ると、3塁ランナーはスタート、しかし投手はスクイズを想定してわざと打者が届かない位置にボールを投げる。3塁ランナーはホームへ突っ込む気が無く途中で止まり様子を伺う。お互い騙し合い探り合いの攻防であった。

カウントは1ストライク3ボール、次がボールなら打者は四球で1塁進塁となるがストライクを投げたなら、待ってましたと言わんばかりに狙い打ちされる。さあ、どうする？

苦しまぎれに投じた球は打者膝元への直球ストライクコース、打者は狙い通りバントでボールを転がした。転がるボールを3塁手がグラブに収めた時には、3塁ランナーは既にホームイン仕方なく1塁へ送球(打者)アウト。

直心高スクイズで1-1の同点に追いつき、3塁側アルプス席の直心高応援団が盛大に盛り上がる。

直真ベンチ

監督「よっしゃ！ナイスバントじゃ。」

「ナイスラン！」

続く打者を三振に打ち取り8回裏の直心高の攻撃を終えた。1-1の同点で迎えた9回表桑原高の攻撃である。

直心ベンチ

監督「さあ最後(最終回)の守りだ、しっかり守って来い！」

「ハイ！！」

桑原ベンチ

監督「直心め最後の守りだと？ふざけやがって、面白れー最後の守りにしてやろーぜ。」

直心高監督の思いは、(最終回の)9回表桑原高の攻撃を0点に抑えて、その裏直心が得点しサヨナラ勝ちにしようという狙いであった。これに対し桑原高監督の思いは、この回の攻撃で得点し、そ

の裏の直心の攻撃を0点に抑えて勝利しようという狙いである。どちらも延長戦は考えず自分勝手な狙いであるが、直心の最後の守りには違いない。

9回表桑原高の攻撃はノーアウト1塁で打者は1番前田である。

前田「長打を打ちたいが、無理は禁物だ。リスクを背負って長打を狙うより確実にヒットを打つ、俺が出塁すれば4番の石田まで回る。なんとしても石田まで回すぞ。」

前田は4球目のカーブをライト前に打ち返しノーアウト1,2塁となったが、次の2番打者が三振3番打者は犠牲バントでランナーを進め、2アウト2,3塁で4番石田に回ってきた。直心高は内外野共に極端な前進守備、1点も失いたくない場面である。

石田「よーし、先輩達が作ってくれたチャンスだ、ここで打たなきゃ4番じゃねえ絶対打ってやる。」

前田「デカイのは要らん、外野まで転がせば俺も還って2点だ。頼むぞ！」

この試合のクライマックスである、両校の応援団が互いに声を上げ祈り勝利を願っている。石田は初球の直球を狙い打ち、打球は前進守備のセンター頭上を越えるヒットとなった。これでランナー2人は悠々生還、打った石田も3塁まで進んだ。しかし、後続がアウトになり桑原の攻撃終了で3-1桑原高2点リードで9回裏直心の攻撃となった。

桑原高監督「さあ、最後の守りだ締っていけ！」

「おお！」

直心高はレギュラーに代打を送った、そして次もその次も代打であった。この狙いは控え選手に甲子園での野球を経験させる為であった、ベンチで観ているだけより実際にプレーした方が深い経験になる。

直心高監督「(代打の控え選手に対し)お前ら、この(甲子園で野球をする)感触をよーく頭に叩き込んで。夏また(甲子園に)来るからな。」

残念ながら直心高の代打攻勢は3者凡退に終わり試合終了。3-1で桑原高の勝利となった。

桑原高前田「よっし！これで2回戦進出だ、丹羽1回戦勝てよ。」

丹羽が所属するMT学園は1回戦を5-1で圧勝し、2回戦でMT学園対桑原高の対戦が実現する。

勝者と敗者

春の甲子園(センバツ大会)2回戦 近畿ブロックMT学園対東北ブロック桑原高との対戦。
試合直前グラウンドに両チームが整列し挨拶をする。中学時代の球友丹羽(MT学園)と前田(桑原高)が約束通り甲子園のグラウンドで再会(対戦相手として)したのだ。互いに言葉は掛けなかったが、熱い視線はぶつかった。

丹羽「前田思ったよりデカくなったな、今じゃ俺より遠くへ打球を飛ばせそうだ。」

前田「丹羽が1番打者の王者MT学園と対戦するなんて最高だぜ、だが負けるつもりは無いからな。」

1回表桑原高の攻撃1番前田の打球はセンターへ高く上がったがセンター丹羽が難なくキャッチ、前田はセンターフライに倒れ後続も凡退して初回無得点に終わった。

その裏MT学園の攻撃、1番丹羽の打球(ゴロ)は1,2塁間を破りライトの前田のグラブに収まり、間に合うはずがないと判っているながら前田は1塁へ送球した。言うまでもなく丹羽はセーフ、しかし球場には歓声が沸いた。ライバル意識むき出しの真剣勝負、中学時代級友同士の対決を楽しみにしている観客は少なくなかった。

1塁ベンチの桑原高サイドは1塁側かライトスタンドでの応援、3塁ベンチ側のMT学園サイドは3塁側かレフトスタンドでの応援と分かれているが、ノーサイド(中立)の応援はバックネットであった。

そしてバックネットには、彼女とタコ焼きを食べながら観戦する清工柴田の姿があった。

柴田「くそー、あいつら良い気になりやがって、お互い(丹羽と前田)の守備位置へ狙い打ちしてやがんな。」

彼女「うわっ、このタコ焼きのタコ大きいっ！」

もう一人のライバル柴田が野球にさほど興味の無い彼女と球場で観戦しているとは知らずに、試合をする丹羽と前田であった。

1回裏MT学園の攻撃はランナーを2塁まで進めたが無得点で終了両チーム引き締った初回となったが、その後互いに押しも押されぬ展開が続き5回終了時に1-1の同点となっていた。そして攻守が交代する時間に地元放送局が、これから6回表の攻撃に入る桑原高応援団にインタビューしていた。

1塁側レポーター「こちら1塁側青森桑原高応援団です。桑原高は男子高ではありますが、応援に花を咲かせるチアリーダー達があります。このチアリーダーは近隣女子高バトン部の生徒達で、今回桑原高の友情応援として甲子園に来ています。バトン部キャプテン、応援にも熱が入っていますね！」

バトン部キャプテン「ハイ、桑原高選手のみんなが良いプレーを出来るように一生懸命応援します！」

レポーター「こちらは、1番ライト前田選手のご両親です。親元から離れて暮らす前田君の応援に大阪から来られました。どうですか、今の後気持は？」

父「息子の姿を見るのは2年ぶりです、随分たくましくなりました。」

母「大阪から遠く離れた青森の高校に進んで厳しい練習に耐えきれず、いつ逃げ帰ってくるかと心配していましたが、立派にレギュラーで試合に出られて幸せです。」

レポーター「相手は中学時代のライバル丹羽君が所属するMT学園です。勝てそうですか？」

父「丹羽君は良い選手でした、その丹羽君がいるMTですからね、そう簡単には勝てないでしょう。でも息子を信じています。」

母「私は勝負なんてどうでも良いです。この大舞台で全力を出し切れれば、その息子の元気な姿を見られれば、それだけで十分です。」

レポーター「試合はこれから後半戦に入ります、負けてませんよー。以上1塁側アルプス(応援団席)でした、それでは3塁側アルプスどうぞ！」

3塁側レポーター「はい、こちら大阪MT学園応援団です。学校が甲子園球場(兵庫県)から(他県に比べ)近いという事もあってアルプスが満席の大応援団です。さて、こちらは先程インタビューがありました桑原高前田選手の中学時代のライバル丹羽選手のご両親です。どうですか、今のお気持ちは？」

父「いやー、息子がMT進学を希望した時は大反対だったんですよ、絶対レギュラーになれないから他校にしろと言いました。でも泣きながら息子は志願しました、絶対一桁とるから、仮に一桁取れなくても悔いは無い、MTに進学したいんだと。今、息子の希望を尊重して良かったと深く思います。ぜひ勝って欲しいですね。」

母「学校と家が近くても全く帰宅しないんだから、母親としては正直面白くなかったです。でも息子の晴々とした今日の姿を見ると、今までのモヤモヤが全部吹き飛びました。」

父「実はね、この試合後前田君のお父さんと飲みに行く約束をしているんですよ。今は敵でも試合が終われば、どっちが勝ったか負けたかなんてオヤジ同士は関係ないです。良い試合でしたねと美味しい酒を飲もうという作戦です。」

レポーター「素晴らしい作戦ですねー。」

母「あら、そんな作戦聞いてなかったわよ。どういうこと？」

父「いや、あの、その。」

レポーター「いい、以上、3塁側アルプスでした。」

試合は徐々にMT学園に傾いていき、7回終了時には3-1でMTリード。桑原高の投手は2番手に交代していた。そして、9回表5-2MTリードで迎えた桑原高最後の攻撃である。この回3点を取らなければ桑原高の負けである。

そんな場面に一人の男が1塁側桑原高ベンチに最も近い観客席から大声を上げていた。

「コラー！お前ら桑原魂はそんなモンじゃねーだろうが！気合い入れんかあ！！」

聞き覚えのある声に桑原高部員達が視線を移したその先には、前主将の加藤の姿があった。

前田「(前)主将、来てくれたんですか！」

加藤「TVで観てよと思ったけど、どうしてもココ(甲子園)に来たくなかったんだよ。いいかお前らだけで野球やってる訳じゃない、アルプスを見ろ。皆一生懸命お前らを応援してくれてるんだ。負けたっていい、恥ずかしい野球だけはするなよ。」

石田「こうなりゃ、鬼に金棒だ。勝つしかねえすよ！」

主将「よっし、未だ負けた訳じゃねえ、今から反撃だ！！」

「おおっ！！」

桑原高が前主将の声援で加熱し、最後の猛反撃に移ろうとした時、前田は加藤の横にいる女性に気がついた。

前田「ああっ、かっ加藤先輩！もも、もしかて横にいるのは佐々さんでは？」

加藤「そうだ、お前佐々さんが気になってただろ？俺と同じ卒業生だから応援団としてアルプスには行けないが、OB,OGとしてお前達を応援しに来たぞ。」

佐々「前田君、カッコ良いわよ頑張ってるね！」

前田「あ、ありがとうございます！今から逆転します！！」

桑原高は最終回2点を返し1点差まで詰め寄ったが、結局5-4でMT学園が逃げ切った。試合終了後、桑原高野球部員はグラウンド内から応援団がいるアルプス席に一礼した。

「残念ながら、あと一步力が足りませんでした。応援ありがとうございました。」

「よく頑張った！胸を張って青森に帰ってこいよ。」

「次、夏(甲子園の全国大会)がある。夏にまた来ようぜ。」

盛大な拍手に送られ選手達はグラウンドを後にした。そして友情応援のバトン部が帰路の貸切バスに乗る直前に、野球部員達は直接礼を言った。その時、バトン部の現キャプテンは、言うか言うまいか迷った挙句、そっと前田に伝えた。

「加藤先輩と佐々先輩(前キャプテン)は付き合っているらしいよ。」

前田「はは、お似合いのカップルだな。(くそ、やっぱり、俺に見せ付けやがったのか。)」

加藤は前田に自分達の仲を見せ付ける事が狙いではなく、佐々が前田を応援すれば良い結果になると思い純粋に自分の彼女に後輩の応援を依頼したのだ。しかし、結果的に試合は敗れ前田を傷付ける事になった。

前田にとって、もう会えないと思っていた憧れの人に会えた、でもその人は憧れの人から先輩の彼女に代わっていた。

選手を乗せたバスが宿泊施設に向かっていると、監督が選手達に労いの言葉を掛けていた。

監督「お前ら、本当によくやった。試合には負けたが、あのMTを最後まで追いつめたんだからな。くよくよするんじゃないぞ、いいな！」

「おお」

前田(俺には野球しかない、女なんて、、絶対夏に(甲子園に)戻ってくるからな、そして優勝するんだ。)

負けた悔しさで流した涙はほぼ乾き、隣の席の選手と冗談を言い合う雰囲気にも戻ってきた。しかし、前田だけは帽子を深く被り顔を見せないようにしたままだった。

ライバル

丹羽、前田が出場したセンバツ大会(春の甲子園)は結局MT学園が2年連続優勝を成し遂げた。その後、全国の高校野球部3年生達は最後の甲子園を目指して練習をしている中、MT学園にも新入生が入学してきた。近畿地方では無敵、甲子園でも優勝を重ねているMT学園に、毎年全国から我こそはと地方スター選手が集まってきているが、今年は特に他校から妬まれるような中学スター選手達がMT学園に入学した。新入生は全国制覇により近い高校を選択したのだ。

MT学園グラウンド

監督「今年の新入生は例年以上に豊作だ。中学では全国大会の上位チームや、個人で全国屈指の選手たちが多く入学した。新入生はこれまで先輩達が築いた名門を汚さぬよう、上級生は新入生に劣らぬよう、今の自分の実力を向上してほしい。」

主将「新入生ども、練習では先輩後輩など無い、自分以外皆ライバルだ。ライバルを蹴落とし、自ら這い上がって来た者に一桁(レギュラー背番号)が与えられる。しかし試合では部員全員がチームメイトだ、背番号の桁や有る無いは関係ない。そして、グラウンド以外では先輩後輩の礼儀をわきまえる様に、いいな！」

新入生「おおっす！」

副将「この春の選抜では狙い通り優勝したが、去年の夏は準優勝に終わった。常勝チームとしては2番ではダメなんだ、去年逃がした深紅の優勝旗をこの夏俺達を取り戻すんだ！」

部員「おおっす！！」

MT学園野球部員125名が、この夏全国制覇を目標に掲げた。

MT学園では野球未経験者は野球部に入部できない、何しろ人数が多い部なので1から教えている余裕は無い。つまり沢山の優れた選手を特推で入部させ、その中でより選りの人材をレギュラーにしていた。言わばチームが全国優勝する為に選手を育てるという考えは無く、チームの中で最上の選手をチョイスするという考えだった。

監督「丹羽、ちょっと来い。」

丹羽「はい。」

「今年の新人の中で一人お前の背番号を狙っている奴がいる。」

「は、はい。覚悟は出来ています、でも譲る気はありません。」

「うむ、良い心がけだ。その新人は去年中学大会で全国優勝したチームの1番打者でポジションは外野で強肩だ。打撃センスも良く足も速い、はっきり言って今のお前より良い選手だと思って

いる。」

「・・・」

「お前の夏の一桁は約束できんからそう思え、挑戦者のつもりで1桁を狙うんだ。」

「わ、判りました。」

センバツ大会には新1年生が入学前で、新2,3年生だけで戦う。センバツでレギュラーしかも全国優勝したからといって夏の大会でもレギュラーが約束される訳は無い。丹羽は入学以来補欠畑を歩み、3年目の春やっと掴んだ一桁を新入生に奪われようとしていた。

丹羽「冗談じゃねえ、やっと手にした一桁を1年坊主なんかに渡してたまるかってんだ。」

MT学園野球部の練習は少し変わっていた。部員が集まって行う合同練習は試合形式の練習が多く、筋トレや持久走などの基礎トレーニングは各個人で勝手にやれというスタイルだ。つまり、やる気の無い選手は練習サボりたい放題、真面目に鍛える奴はメキメキと力を付けてくる。そして、どうすれば良いか迷った時にはコーチがアドバイスをくれるのだ。また、ライバル同士を互いに意識させ切磋琢磨の後、より優れた選手を選択しようという考えであった。

中学時代はスター選手でもMT学園の方針にくじけて、選手として腐っていく生徒も少なくは無い。また丹羽のように急に伸びてくる選手もいて、MT学園の方針は一長一短であった。

5月MT学園においてセンバツ優勝チーム対補欠選抜チームの紅白戦が行われた。レギュラーを狙う補欠チームにとっては背番号を奪うビッグチャンス、センバツ優勝したレギュラーチームとしては負ける事は許されない、もし負けるような事があれば、MT学園レギュラーの面目丸潰れ即レギュラー交代となるのだ。

とは言え、レギュラー対補欠では力の差が有り過ぎるという事で、ハンデとして監督コーチは補欠側に付き、レギュラーチームは選手だけで戦わなければならない。益々レギュラーチームにはプレッシャーが掛る。

レギュラーチーム

主将「いいか、俺達は春の全国王者だ、もし今日負ければ部活引退を覚悟しとけよ。」

副将「勝って、このメンバーで夏も甲子園へ行こうぜ。」

選手「おおっす！」

補欠チーム

監督「お前ら、今日勝ったらレギュラーチームは全員補欠だ。お前らにだって一桁のチャンスはあるぞ。」

コーチA「敵の弱点は全て教えてやる、もう勝ったようなモンだぞ。」

コーチB「これだけのハンデを貰って勝てなきゃ背番号は無いと思え。」

選手「おおっす！！」

試合本番では各高校が他校のデータを集め研究するのは当たり前、また自高より格下の高校にリードを許す事もある。そんな中で勝ち上がる為に、このような実戦形式の紅白試合をMT学園では定期的に行い、選手の士気を高めていた。

レギュラーチームの先発はエースで主将の金森、150km/h近い直球を武器とする本格派左投げ投手であり、早くもプロ球団からスカウトが注目していた。補欠チームの先発は1年生の六角、今年のMT学園特推No.1選手で中学野球の全国優勝投手でもあり、これまた10年に一人の逸材とプロから注目を浴びている。

1回表補欠チームの攻撃は1番センター滝川、1年生で監督から丹羽のライバルと認められた奴である。滝川が右打席に入った。

丹羽「む、滝川はいつも左打席だったはず、それなのに右打席、まさか投手によって打席をスイッチするのか？」

金森「いつもの右投げ投手には左打席で打ち、俺のような左投げ投手には右打席か、中学で全国優勝したチームのスイッチヒッターだからと言ってそう簡単には打たせんで、何しろ俺はセンバツ優勝投手なんでな。」

滝川「さあ、来い！」

滝川は金森の投じた4球目のカーブに上手くタイミングを合わせ三遊間へと打ち返したが、ショート(遊撃手)が上手く打球に追い付き素早く1塁へ送球、きわどいタイミングであったがアウト。

滝川「くそ、中学なら余裕でセーフだったはず。それにしても良い守備してるな、さすが王者のレギュラーだけ。」

金森「あの野郎、簡単に(タイミングを)合せやがったな、右打席だったからアウトになったが左打席ならヤバかったぜ。(左打席の方が1塁ベースに距離が近い)」

丹羽「あの(滝川の足の)速さ、しかもスイッチヒッターか、監督が俺にプレッシャーを掛けてきた理由が判ったよ。」

監督「打球に追い付くのは補欠でもできる、掴んだボールをいかに速く1塁まで送球できるかが内野手のキーポイントだ。この打席はレギュラーの勝ちだな。」

1回表の攻撃が三者凡退で終わり、その裏レギュラーチームの攻撃である。どの打者に対しどんなボールを投げるかは、補欠選抜チームのコーチがサインを送っていた。つまり、各打者の弱点を付く作戦である。

レギュラーチームの1番はセンター丹羽が打席に入った。

丹羽「来やがれ！」

六角「フン」

丹羽の挑発に乗らず1年生とは思えない落ち着いたピッチングで丹羽を翻弄する、丹羽は5球目を打ち上げレフトフライに倒れた。この時もコーチ達は冷静にメモを取っていた、両チームの1番打者がどんな状況でどう判断し、どんな結果に終わったかを採点しているのである。勿論、他の選手全てが採点対象であり、このポイントが選手の評価となりレギュラー争いに大きく影響するのである。

監督「1番打者対決の1ラウンドは滝川優勢だな。」

コーチA,B「異論ありません。」

試合は徐々にレギュラーチーム優勢に傾きだし、結果は2-0でレギュラーチームの勝利となった。例年なら5点以上の大差で勝利するのだが今年は2点差、この差を大と判断するか小と考えるかで意見は分かれた。

レギュラーチーム

主将「おいおい、俺達センバツ王者だぜ。2ヶ月前まで中学生だった坊や達相手に2点しか獲れねえのかよ。」

副将「今年の新人生は例年とは違う、それにしても2得点は恥ずかしいな。」

丹羽「六角(補欠チーム投手)はコントロールが良かった、ストライクコースの際どい所を付いてくる。」

主将「それは丹羽だけじゃなく、他の打者にもだった。また、各打者の弱点は監督やコーチから筒抜けだ、そこを狂い無く付いてきたんだ。」

副将「その中で少ないチャンスをモノにして、貴重な2点をもぎ取ったという訳だ。」

主将「今日ヒットを打てなかった奴は反省し、弱点克服を期待する。」

補欠チーム

監督「うむ、試合には負けたが良い負け方だ。」

コーチA「センバツ優勝チームを2失点に抑えたんだからな、上出来だ。」

六角「はい、野手が上手く守ってくれました。」

コーチB「打線(の無得点)は仕方ないか、しかし今日2ヒットの滝川は良く打ったな、上手かったぞ。」

滝川「ありがとうございます、でも試合に負けて悔しいです。」

この紅白戦では1年生の六角と滝川が高評価を得ていた。その後、自信を付けた1年生2名はレギュラーチームの練習に加わり、上達だけでなく表情や声を出す等の猛アピールをしていた。3年生達も負けてはられない、何しろ最後の甲子園出場チャンス、ラストスパートとばかりに練習に気合いを入れていた。

時は流れ、夏の全国大会予選登録選手がMT学園でも発表された。

監督「背番号1(エース投手)金森(主将)・・・8(センター)滝川(1年)・・・11(2番手エース)六角(1年)・・・15丹羽・・・」

六角(うっし、甲子園で投げるチャンスがあるぞ。)

滝川(やった、1年生でレギュラーだ。)

丹羽(ま負けた、一桁を1年生に奪われた。春全国優勝レギュラーが夏の補欠かよ。)

選手発表の後、部員達は喜ぶ者もいれば悔しがる者もいた。また3年生で選手に選ばれなかった部員は明日から自分の為の練習では無く、チームが勝つための献身的な練習になる。中にはやる気を失い練習に来なくなる者もいた。

丹羽はショックであった、実力勝負の世界とはいえ厳しい現実を認識するのに時間が必要だった。

コーチB「丹羽、悔しいだろうが腐るなよ。15番でも出番はあるかもしれないし、滝川の調子が悪ければお前のスタメン出場もあるんだからな。いつでも(試合に)出れますって、(気を)張っとけよ。」

丹羽「はい。(そうだ、この背番号は現時点での番号だ、県大会の調子によっては全国大会の登録選手で俺と滝川が逆転することも有り得る。ラストチャンスを掴むんだ。)」

同じ頃、他のチームでも予選登録選手が発表されていた。丹羽のライバル兵庫清田工の柴田はエース(背番号1)、青森桑原高の前田は3年連続の背番号9(ライト)でレギュラーとなっていた。

この3人の約束(甲子園で対戦する)は、今年の春に前田と丹羽は対戦しているが柴田が未だ甲子園に出場できずにいる。柴田にしても(甲子園出場への)ラストチャンス、絶対に県大会優勝をと意気込んでいた。

気まぐれな風

夏の高校野球全国大会(甲子園)の都道府県予選が開催された。甲子園出場を目指す高校もあれば全国制覇を掲げる高校もある。各高各部員様々な思いを胸に熱気溢れる試合が繰り広げられている。

前田の所属する青森県桑原大付属高校は、去年夏の県大会優勝をしながら、部員の不幸事で全国大会を出場辞退に追い込まれたが今年は春に続き夏も甲子園出場を狙っている。桑原高は出身地で1流スターになれなかったの2流スターが流れてくる高校で有名であり、桑原高で花を咲かせてやろうという選手が多いチームであった。

桑原高は主砲石田と走攻守揃った前田を中心に貫録の横綱相撲で勝ち上がり、ピンチらしいピンチもロクに無いまま県大会優勝し甲子園出場を決めた。

大阪府MT学園は、丹羽がレギュラー落ちするもスーパールーキー滝川の活躍とセンバツ優勝の実力を見せつけ優勝。

兵庫県清田工業は、MAX148km/hの直球と縦落差の大きいカーブを武器とするエース柴田とどんな投球にも確実に打ち返す主将で1番打者の木下、長距離打者1,2年生で占めるクリンナップ、そして広い守備範囲を誇る外野手で構成され清工史上最強と噂されていた。

その清工は1,2回戦を危なげなく完勝し、以降も順当に勝ち上がっていき、清工野球部創立以来初の決勝進出となった。その決勝戦で相手はプロ球団が注目するエース明智がいる優勝候補の西海大付属高校。以前対戦して負けた相手であったが、今回は清工も負けてはいない。両エースの好投で0-0のまま延長戦14回裏、主将木下のサヨナラホームランで県大会初優勝を成し遂げ、前田、丹羽、柴田の3人は甲子園出場を決めた。

その後、夏の全国大会(甲子園)開会式前で3人は再会した。

柴田「おお前田ひっさしぶりー。デッカクだったなあ。」

前田「まあな、練習後の飯しか楽しみが無いもんでな。しかし柴田は、あの弱小高でよくココに(甲子園に)出てこれたな。」

柴田「弱小高は入学前から覚悟の上だ、俺がこの弱小高を甲子園に連れて来るって決めてただよ。」

前田「偉そうに言えるのも今のうちだ、言ってる。ところで、丹羽今回は負けんぞ春のリベンジだ。」

丹羽「ああ、頑張れよ。」

柴田「何だよ、甲子園だってのに元気ねえな。どうしたってんだ？」

丹羽「お前らは一桁(レギュラー)だけど俺は二桁(補欠)なんだよ、判るか？」

柴田「そう言うけど春に丹羽と前田は一桁で直接対決してるじゃねえか、俺なんて一桁でも出場できなくて入場料払って観客席でお前らの試合を観てたんだぞ、判るか？」

前田「まあまあ、止せよヒガミ合うのは。試合でケリを付けようぜ。」

柴田「よーっし、やっと念願叶った夢の舞台だ、お互い勝ち上がって対戦しようぜ。」

前田、丹羽「ああ、勿論だ。」

この時の3人の会話が一部のローカル新聞に記載され、今大会のトピックスとなった。

1回戦神奈川県代表の松林商工対兵庫県代表清田工業の対戦は1-2で清工の勝ち、清工は甲子園初出場で初勝利を飾った。同じく1回戦青森県代表桑原大付属高対鹿児島県代表青空実業の対戦は打ち合いになり、6-5で桑原高の勝利であった。大阪MT学園は組み合わせ抽選の結果2回戦からの試合となる。

そして2回戦、青森県代表桑原高対兵庫県代表清工の対戦となった。

清工柴田「前田、待ってたぜこの時を。お前のいる桑原高と甲子園で対戦できる日を何度夢に見たことか。思えばこの春、前田と丹羽が甲子園で対戦した時俺は観客席で試合を観ていた。正直羨ましいと思ったぜ、勝ち負けの結果よりもココで対戦できる事がな。そして今俺は甲子園のマウンドに立った、前田覚悟しとけ。」

桑原高前田「柴田と対戦するのは楽しみだが試合はウチが勝つぜ、何しろMTにリベンジしに来たんだからな。悪いがお前をメッタ打ちにして勝利してやる。」

今大会優勝候補とまでは行かないが春夏連続出場の桑原高、対するは初出場の清工の試合。中学時代のライバル対決も含めてソコソコ話題になっており、観客も声援も多い試合となった。MT学園の選手達はこの対戦をTVで観ていた、いずれ自分達と対戦するであろう敵チームの研究の為だった。

1回表桑原高の攻撃 1番前田の打席。

清工柴田「前田の奴中学時代からのシャープなバッティングでヒットを量産している。変化球を投げりゃ長打は無いと言いたいが、それじゃ面白くねえ、直球で勝負してやるか。」

桑原高前田「柴田が成長していれば変化球で勝負してくるはず、しかしあの顔、直球勝負のようだな受けて立つぜ。」

初球挨拶代わりに直球は、ど真ん中のストライク。直球狙いの前田はフルスイングするも空振り

であった。

桑原高前田「あんの野郎、ど真ん中で来やがった。」

清工柴田「へっ、コースの読み違いか？その程度で1番(打者を)張れるなんて桑原も大した事はねえな。」

二球目はアウトロー(外角低め)の直球、前田は見送りボールとなった。

清工柴田「むっ、見やがった(見送りやがった)。くそ、目(選球眼)も良くなりがって。」

桑原前田「ふう、ボールには手を出さんぜ。」

1ストライク1ボールの3球目ドロップ(ふわっと落ちる縦のカーブ)を前田は打ち返し、打球は1,2塁間を抜けてライト前ヒットになった。

清工柴田「くそっ、やっぱ変化球狙いだったか。」

桑原前田「くっ、外野手の上を越すつもりだったが、予想以上に落差の大きいドロップで打ち返すのがやっとな。」

2番打者は送りバントで前田を2塁に進塁させたが、後続打者がヒットを打てず桑原高は無得点に終わった。

その後も一進一退の攻防が続き、0-0のまま4回表桑原の攻撃1アウトランナー2塁で打者は4番石田。

桑原高ベンチ

監督「先制点をやりたくない清工は(石田を)歩かせてくるだろうな。」

主将「ランナーが溜まってチャンスが広がりますね。」

清工ベンチ

監督「逃げは許さん、勝負だ。」

柴田「今年の青森県大会で7本のホームランを打っている石田か、体もデカイが態度もデカそうだな。その自信満々の顔を泣き顔に変えてやるぜ。」

柴田は2球続けてコーナーを付くもボールとなった。

桑原石田「へっ、結局勝負と見せかけ逃げるのか(歩かせるのか)。」

前田「石田油断するなよ、柴田は逃げたりしないぞ。」

3球目石田の胸元へグイっと食い込むシュートでストライクになり石田を驚かせたが、続く4球目石田のタイミングを狂わすチェンジアップに手を出し3塁へのゴロとなった。
石田「くそっ、打ち損じた、噂より良いピッチングしやがる。」

互いにランナーは出すも得点に至らず、迎えた7回裏清工の攻撃は3番(打者)からである。
疲れが見え始めた桑原高投手に対し監督は(投手を)代えるか続投か悩んでいた。クリンナップから始まるこの回の初めに交代するべきか、クリンナップとは言え1,2年生だから様子を見て次の回から交代すべきか、運命の分かれ道である。

清工監督「ほう続投か、ウチのクリンナップも随分甘く見られたモンだ。よーし、そろそろ仕掛けるか。」

この回の先頭打者(3番打者)は珍しく大振りのフルスイングをしていた。敵チームにプレッシャーを与える為だった。大振りはボールに当たりにくい半面、当たれば飛んで行くハイリスクハイリターンである。

3番打者はレフトへの大きなフライでアウト,4番は左中間を破る2ベースヒット,5番が深いセカンドゴロの間に2塁ランナーが進塁し、2アウトランナー3塁となって打席には6番投手の柴田が立った。

清工柴田「よーし、やっと俺がヒーローになる時が来たぜ。今まで投手としてしか登場しなかったが、実はバッティングも凄いてココを見せてやる。」

桑原高前田「柴田の中学時代の苦手コースはインハイ(インコース高目で打者の胸元への投球)だった、克服していなければ通用するはず。しかし克服していて、俺がインハイを(投手に)要求する事を(柴田が)読んでいれば、柴田は待ってましたと言わんばかりに打つだろう。さあ、どうする？」

清工柴田「インハイが苦手だった頃が懐かしいぜ、さあ来いインハイ待ってるぜ。」

桑原監督「苦手コースをそう簡単に克服できるモンじゃない、望み通りインハイに投げてやれ。せいぜい、打ちあげて外野フライだろう。」

柴田への初球はインハイへの直球だった、柴田は迷わずフルスイング、高めのボールを叩きつけるようなバッティングで打球はワンバウンドして高く上がった。長い滞空時間を利用して3塁ランナーは悠々ホームイン、打った柴田も1塁へは余裕でセーフとなり清工が1点先制した。

清工ベンチ「ナイスバッチ柴田。」

桑原前田「柴田の野郎、小技まで覚えやがって。ムカつくエースだぜ。」

後続が凡退し清工の攻撃終了、1-0清工リードで8回表桑原高の攻撃は選手達がベンチ前で円陣を組んで気合いを入れていた。

主将「俺達の目標はMTを倒しての全国制覇だ、こんなトコでこんな奴らに負ける訳にはいかんぞ。」

副将「苦しい時はアルプスを見ろ、皆俺達を応援してくれてるんだ。この回逆転するぞ！」
「おおっ！」

清工柴田「こんな奴らで悪かったな、お前らこんな奴らに負けるんだ、せいぜい聞こえの良い言い訳を考えとくんだな。」

桑原高この回の先頭(2番)打者が四球で歩きノーアウト1塁で3番打者を迎えた。

清工監督「ここは手堅く送って、4番の一打に期待ってとこかな。」

桑原監督「何もするな、送れば空いた1塁に石田が歩かされる。下手にヒッティングでのダブルプレーは避けたい。」

3番打者はサイン通り一切スイングせず見逃し三振、1アウトランナー1塁で4番石田を迎えた。

清工柴田「フン、1年から4番を張る石田か、プロも注目するスラッガーらしいが、そいつを抑えて俺に注目を集めてやるぜ。」

桑原石田「来い！(2年だからってナメるなよ、俺は桑原で1年から4番を張って来たんだ、この回で決めてやる。」

桑原監督「センターフラッグを見ろ(スコアボード頂上に立つ全国高校野球選手権大会の旗がレフト方向に靡いている)、風は浜風だ。石田、高くレフトへ打ち上げれば風が(打球を)スタンドまで運んでくれるぞ。」

甲子園球場における浜風とは、日中気温が高い時(夏に多い)に上昇気流が発生し瀬戸内海から陸に向かって吹く海風のこと、甲子園球場のライトからレフト方向へ強い風が吹くことがある。なのでレフト方向への打球はフォロー風になり打者を助けるが、ライト方向への打球は向かい風となり打者を苦しめる。

石田は打席に立ち、応援団のいるアルプス席を見た。そのアルプス最上段には自高応援団旗を支える応援団副団長の姿があった。強い風に靡く団旗を試合中ひたすら一人で支え続ける勇姿に石田は報いたいと思ったのだ。

石田「副団長、あのデカイ団旗をたった一人で守り続ける心意気あっぱれです。この打席で勝負を決めますから。」

柴田が投じた初球は石田の胸元へ148km/hの直球であったが石田はジャストミート、打球は高く舞い上がった。

石田「いっけえー！風よ、スタンドまで運んでくれ！！」

桑原高応援団はこの時応援を止め打球の行方を見守った。皆、心の中で打球がより遠くへ飛ぶ事を望んでいた。

反対に清工応援団はレフトが打球をキャッチする事を願ったが、打球は浜風に乗ってレフトスタンドへ飛び込む逆転2ランホームランとなった。

桑原高ベンチ

監督「いよっし！良くやった！！」

主将「ナイスバッチ石田！」

前田「さすが東北の大砲！」

石田「おっしゃあ！」(初球は直球が来るって前田さんのアドバイス通りでした。前田さんありがとうございます。)

清工柴田「くそっ！上手く風を利用しやがったな、俺の直球があんなに跳ね返されるなんて。」

いつ吹くか判らない浜風をタイミング良く味方に付けた石田のホームランで桑原高は2-1と逆転に成功し、この回の攻撃を終えた。

皮肉にも次の8回裏清工の攻撃時には浜風は止み、熱い日差しが照らしていた。おまけに桑原高は二番手投手に代わり、速いボールをビシバシ投げていた。

清工ベンチ

監督「さあ反撃だ、取り返せ！」

「ウッス！！」

この回2アウトで主将の木下に打席が回ってきた。いつもならチームプレーに徹し、大振りせず確実に野手のいない場所を狙って打ち返す木下だが今回は違っていた。チームを含め木下自身も負けを覚悟し始めていた。それでも、僅かな期待を捨てずにチャレンジを試みる清工であった。

監督「木下、ここは任せた。自由にして良いぞ。」

柴田「こうなったら、場外までかっ飛ばせ！」

木下「ウッス！」

木下は悔いを残すまいと5球目をフルスイング、打球はライト前田の頭上を越えるヒットで木下は2塁を蹴って3塁へ向かったが、ライト前田から矢のような返球で3塁タッチアウト。清工この回無得点に終わった。

桑原監督「ナイススロー前田。」

石田「前田さん、ナイスプレー。」

前田「ザッツ、イージー！」

清工柴田「なんて速い返球しやがるんだ、プロ並みじゃねか前田。」

9回表桑原高最後の攻撃はランナーを2塁まで進めたが追加点ならず、2-1桑原高リードで迎えた9回裏清工最後の攻撃である。

清工ベンチ

監督「未だ勝負は付いて無いぞ、諦めるな！」

木下主将「1点取れば延長、2点でサヨナラだ、さあ決めるぜ！」

「ウッス！」

桑原ベンチ

監督「さあて、勝利監督のインタビュー準備でもしとくか。」

主将「ラスト、締って行こう！」

「おおっ！！」

清工最後の攻撃は無得点に終わりゲームセット、2-1で桑原高の勝利となった。

試合後、球場を出た前田と柴田は握手を交わし、互いの健闘を称え合った。

前田「柴田、良い試合だったな、ナイスピッチだったぜ。」

柴田「前田こそ、全国屈指の外野手になりやがって、参ったよ。」

嘗ての球友の会話は3分程の短いものであったが、念願叶った闘いを終えた二人には十分すぎる時間であった。そして、その会話は新聞ネット雑誌等のメディアに取り上げられた。

翌日、その記事を黙って見るMT学園の丹羽は何やら寂しそうであった。

丹羽「良い試合したな、二人共。俺は今年ベンチウォーマー(補欠)で試合に出れそうにないぜ。」

積もる思い

中学時代の球友丹羽、前田、柴田にとって高校野球最後の大会(夏の全国大会)において、柴田は3回戦で敗れた。

そして柴田の所属する清工に勝った桑原高前田は準々決勝で姿を消し、残るは今年春夏連覇を狙う王者MT学園の丹羽だけになっていた。

そのMT学園(大阪代表)は準決勝で今大会優勝候補No.1徳島県(四国)代表松波高校との対戦となった。松波高の特徴は、MAX150km/hの直球と多彩な変化球を武器とする今大会屈指の本格派投手蜂須賀と主将で4番打率6割、盗塁阻止率98%の今大会No.1捕手福島のパッケージであった。この福島は打ってよし走ってよし守ってよしに加え投手のリードだけでなくチームも引っ張る存在であり、今年の高校生ドラフトの目玉と言われプロ球団から注目されていた。

MT学園対松波高の試合前

MT学園ベンチでは

監督「対戦相手の松波高はおそらく、お前らが今まで出会った事が無い位の強敵だ。今日は王者としてではなく挑戦者のつもりで挑むんだ。」

主将「相手は今大会優勝候補No.1だ、今までウチがそう呼ばれていたが今大会は違う。ひっくり返して優勝旗を手にするぞ！」

「おおっす！」

松波学園ベンチでは

監督「18年ぶりの甲子園出場、そして我が高初の(甲子園)準決勝、しかも相手は王者MT学園だ。いいか、奴らは勝つために全国から集められたエリート球児達、それに引き換えお前らは地元の野球好きな一般生徒だ、負けたって恥ずかしくもなけりゃ失うものも無い。どおって事ないんだ、お前らの好きな野球をこの甲子園球場で思い切り楽しんで来い！」

「ハイ！！」

勝つ為に召集された120人超の私立高野球部と地元の野球好き生徒を鍛え上げた十数人の公立野球部、この対比的な対決はメディアだけでなく一般の高校野球ファンの注目を集めた。

観客A「なんだかんだ言っても名門が勝つさ、選手層の厚さが違うよ。」

観客B「名門高が勝っても面白くねえ、公立高を応援するね。」

観客C「ヨソの地からスター選手を集めたチームより、地元で生まれ育ったイモ選手が甲子園に出るなんて、それこそスーパースターさ。」

観客D「数十年に一度の豊作である公立高より、常勝狙いの私立高だね世の中そんなに甘くないよ。」

観客は皆勝手な持論を述べているが、選手にとってみればそんなの関係無い、思い切り野球をするだけだ。

試合はMT学園が先制したがすぐに松波高が逆転、その後も松波高優勢で回が進み7回を終了し5-1で松波高リードであった。

常勝MT学園にとって自分達より強いチームと対戦すると意気消沈し自滅する悪い癖があった。そして5-1のまま迎えた9回表MT学園最後の攻撃、2アウトで打者は滝川(1年)が意地を見せライト前ヒットを打った。

MT学園監督「代走丹羽！」

丹羽「おおっす！」

監督「丹羽、ヨソ行きの野球はするな、いつも通り全力で走れ。」

丹羽「おおっす。」

1,2年生と補欠生活が続き3年生の春にようやく掴んだレギュラーで全国制覇を成し遂げた、しかし夏に滝川にレギュラーを奪われ補欠に落ちた丹羽にとって今大会初の試合出場であった。

丹羽「俺に託されたのは盗塁、そしてその後の1ヒットでのホームインだ。」

松波高蜂須賀「やだねー、盗塁の臭いプンプンさせて、見え見えだつてーの。」

松波高福島「良いぜー、いつ逃げても(スタートしても)、俺が絶対刺してやる。(盗塁阻止してやる)」

カウント1ストライク1ボールの後、蜂須賀が投球動作に入るや丹羽はスタートした。

打者は援護のゆっくりとした空振り、福島は素早く2塁へ送球、2塁ベースカバーに入ったショート(遊撃手)は2塁ベース上にグラブを置くと、低い弾道でレーザービームのようなボールがグラブに吸い込まれていき、その直後スライディングした丹羽のスパイクがグラブを踏み込んだ。

審判「アウト！」

主審「3アウト、ゲームセット！」

試合終了5-1で松波高の勝ち、MT学園は準決勝で姿を消した。

試合終了後、TV中継のアナウンサーと解説者が試合を振り返っていた。

アナ「いやー、MT学園の丹羽君、盗塁のスタートは悪くなかったですよね？」

解説者「はい良いスタートでしたが、福島君が2塁へナイススロー(送球)でしたね、さすが今大会No.1捕手。クイックモーションでショートのグラブへストライク、盗塁阻止率98%はダテじゃないかったですね。」

アナ「これは丹羽君を責めるより、福島君を褒めるべきと？」

解説者「はい、ここは福島君のスローを称えるべきです。」

アナ「福島君は今大会では未だ一度も盗塁を許しておりません。素晴らしい送球で俊足丹羽君の盗塁を阻止し、見事チームを決勝に導きました。」

試合後ホームベース前では勝利高の松波高校歌が球場に響き渡る間、負けたMT学園部員は自軍ベンチ前で悔し涙をながしながら松波高校歌を聞いていた。

一方柴田の自宅でこの試合をTVで観戦していた柴田と前田(試合に負けて部活引退なので大阪に休暇として帰郷していた)は、丹羽の敗退を自分の事のように大変残念がった。

柴田「あっ！丹羽が刺された！！」

前田「福島め、なんて肩してやがるんだ、くそ！」

柴田「これで俺達全滅だな。」

前田「ああ、全部終わった。」

柴田の彼女「大袈裟ね～、高校野球が終わっただけでしょ。野球人生は続けようと思えばまだまだ続くじゃない。」

柴田前田「えっ？」

彼女「大学とか社会人野球とかあるでしょ？」

柴田「まあ、それはそうだけど。」

前田「俺達、甲子園で優勝してプロになるって自分で勝手に夢見てただけなんだよな。」

柴田「プロになれなかった場合、卒業後の進路なんて一切考えてなかったよな。」

彼女「これから考えれば良いじゃん、時間はたっぷり有るでしょ？」

前田「そうだな、良い事言ってくれるね、柴田には勿体ない彼女だよ。」

彼女「ありがと。」

柴田「コラコラ、彼氏の前で堂々と彼女を口説くんじゃない。」

試合後野球部寮に帰った丹羽は自室で涙を流していた。自分がアウトになって試合に負けた事、レギュラーを奪われた事、苦しかった練習、先輩からの体罰やパシリなど野球漬けの高校生活を思い出しては涙が溢れ出ていた。丹羽はどんなに苦しくても悔しくても涙は見せなかった、しかし今日は特別今までの涙が一気に零れて止まらなかった。

そんな時、部屋にあるインターフォン(寮の管理人室と各部屋を接続している内線電話)が鳴った。

「はい、丹羽です。」

「あ丹羽君、試合残念だったね、気分が落ち着いたら管理人室に来ておくれ。」

「はい、判りました。」

寮母に呼ばれて丹羽は管理人室に入った。

「丹羽です、失礼します。」

「あら、もう気分は治ったのかい？」

「はい、大丈夫です、ご心配をお掛けしました。」

「そうかい、そりゃ良かった。じゃこれ、丹羽君に渡しとくね。」

「な何すか、これ？」

寮母が丹羽に渡したのは、手紙がぎっしりと詰まったみかん箱サイズの段ボールだった。

「やだねー、丹羽君へのファンレターじゃないか。」

「えっ、コレ全部俺につきか？」

「そうだよ、丹羽君が入寮してから今日までに届いたレターだよ。自分が言った事を覚えてないのかい？」

「そう言えば、そうでした。」

丹羽は入寮した日、野球に専念する為自分へのファンレターが届いた場合、部活引退まで知らせずにとっておくように寮母に依頼していた。

「野球の名門高だからねえ、ましてや甲子園出場となればTVに映るし全国から手紙が来るよ、丹羽君は返事を出してないから少ない方だよ。はい、コレは全部丹羽君の、確かに全部渡したよ。」

「あ、はい、ありがとうございました。」

段ボールを自室に持ち帰った丹羽は、しばらくの間段ボール箱を見つめていた。

「思ったより結構有るな、どうしようコレ、読まずに捨てるのも悪いし。かといって2年前のレターを読んで今更返事を書くのも変だしな、でも返事を出さないよりは良いんだろうか、んー判んねえ。ま明日から部活引退で暇だし、じっくり読むか、少しは気が紛れるかもしれない。」

丹羽は手紙の封を開けずに消印の新しい手紙から読めるように仕分けした。

「あ、コレつい3日前のだ。山内裕季子さんか。あ先月も山内さん、半年前も去年も山内さん。」

山内が気になった丹羽はピンポイントで山内の手紙だけを集めた。

「俺が入寮して以来、ほとんど毎月のように出してくれてたんだ。それに引き換え俺は一度も返事を書かないばかりか読みさえしなかった。それなのに毎月書いてくれたなんて。」

丹羽は迷わず山内からの手紙を消印の古い順から読んでいった。

手紙は好意を一方向的に伝えたり頑張れといった応援レターではなく、今頃こんな壁に悩んでいるのではとか、苦しい時は正面から立ち向かわず回り道して良い結果をもたらす事もあるとか、逃げたい時でも絶対逃げてはいけない時もあるといった、まるでその日あった出来事を全て知っているかのようなアドバイスもあった。そして山内自身も部活が盛んな高校で寮生活を送っており、丹羽の気持ちが良い判ると書いてあった。

何より丹羽の誕生日には毎年丹羽の人形キーホルダーやお守りをくれていたし、バレンタインデーには手作りのチョコが送られていたらしい。(チョコは寮母さんが食ってメッセージだけ残っていた。)一通り読み終えた中で丹羽は、ある一つの法則に気が付いた。それは毎度の手紙の締めくくりの言葉で、こう書かれてあった。

「今回も読んでくれてありがとう、あなたが私の手紙を読んでくれたと思うだけで私は幸せな気分になります。返事は出さなくて良いです、あなたの時間が勿体ないから。ただ、迷惑なら二度と手紙は出すなと伝えて下さい。明日もケガ無くあなたが野球をできますように、MT学園 山内裕季子。」

「やっ山内さん、ありがとう。」

丹羽の胸には熱いものが込み上げ、手紙を持つ手は震えていた。そして嬉しさで涙が零れ、こんな事なら毎回タイムリーに読んでおくんだと後悔する丹羽であった。

「どうしよう、さんざんシカトしておいて今更お礼の返事を書いても気分悪いだろうな、いや待てよ、山内さんは返事は不要と書いているし、俺が読めば嬉しいと書いてある。これまでの事情を説明すればきっと判ってもらえるはずだ。あ、あれ？MT学園？ウチの女子生徒って事か？」

他のファンレターには目もくれず、まるで山内スイッチが入ったかのように、丹羽は山内に返事を書こうとした。しかし、丹羽にとって手紙を書くという行為は生まれて初めての事、おまけ

に異性に出すという事も加わり何を書いて良いか判らなかつた。

「えー、丹羽です。今度会いませんか？なんて書いたら唐突すぎるな人柄を疑われる。良い天気ですねって雨が降ってたら話にならんし。彼氏はいるのですか？って書いたら、彼氏がいたら毎月手紙書くか！って怒られるかも。むむ難解だ。」

丹羽は一晩悩んでようやく返事を書きあげた。中身はレターのお礼と部活引退後にまとめて手紙を読んだ事、そして山内に伝えたい事、聞きたい事を素直に書いた。

「これで良しと、おっ、もう朝か、今からポストに投函してくるか。」

丹羽は早朝初めての手紙を持ってポストの前に立った。手紙は札束が入っているかの様に膨れ上がり、丹羽の2年半の思いが込められていた。

「山内さんってどんな子だろう？この手紙はラブレターになるのかな？それより今更コレを読んでもくれるかな？」

丹羽にとって初めてのラブレターはポストに落され、丹羽は恥ずかしそうに下を向いて歩いて帰る道中、一つの事実に気がついた。

「あれ？山内さんがMT学園ってことは同じ高校な訳で、別に手紙なんか出さなくても学校で会いに行けば良いんじゃないか？」

丹羽が明日にでも山内に会いたいと思っても今は夏休み中で授業は無い、つまり二学期にならないと山内には会えないのだ。会いたくても会えない、そんな気持ちが丹羽の思いを高めていった。

野球一筋に青春をかけた丹羽にとって初めての恋だった。

雨が止み 雲が流れて 虹が出る

またいつか

高校野球部として最後の大会を終えて部活引退した嘗てのライバル丹羽、前田、柴田の3人は、正月休みに生まれ育った地元へ帰郷していた。そして、中学野球時代の思い出の河川敷グラウンドで待ち合わせた。

3年前互いにチームメイトからライバルへ変わった地であり、今はライバルから同級生に戻って再会した。

柴田「おお、久しぶりだな前田に丹羽。」

丹羽「ああ、今日は彼女同伴じゃないのか？」

柴田「まあな、そういつも一緒にいるわけじゃないよ。前田は相変わらず元気そうだな。」

前田「あたり前田！って古典的なギャグを言わせるんじゃない。」

甲子園で対戦した時の敵意むき出しと違って、3人とも気の合う野球少年に戻っていた。

柴田「俺達ドラフト指名されなかったな。」

丹羽「ああ、俺や柴田は無理と判ってたけど、前田も指名されなかった。」

前田「これが現実ってやつだよ、プロ球団から指名受ける高校生なんて毎年ほんの一握りだけ。」

柴田「俺達はプロからすれば、スター選手の引き立て役だったんだ。これで目が覚めたよ。」

丹羽「あの、俺は一応プロ球団からスカウトが来たんだぜ、君を指名するからその時はよろしくって。」

柴田「でも、実際には指名はされなかっただろ。スカウトは他に何十人の選手にも、君を指名するってなんて言ってるんだろ？」

丹羽「だろうな、指名されなかった事でそれが判ったよ。」

前田「俺も、大人社会ってのがよく判った。」

柴田「な何だよ意味深だな。」

丹羽「前田にもプロからスカウトが来たんだろ？」

前田「ああ、絶対君を指名するから他球団のスカウトには会うなとまで言われたけど、実際は指名されなかった。」

野球少年達の純粋な夢は、大人達の都合で無残にも崩されていった。

柴田「高校卒業後はどうするんだ？」

丹羽「俺は関西圏の実業団からオファーがあって、そこへ就職する。社会人野球で名を売ってプロへのラストチャンスに掛ける。そこでダメならプロは諦めるよ、草野球を趣味とする普通の社会人になる。」

前田「俺は大学へ進学して高校教員免許を取って、将来は高校野球部監督として甲子園に出るんだ。幸いウチは大学付属高校だから、一般入試よりは楽に進学できる。勿論大学での野球部入部が条件だけだな。」

柴田「俺は普通に就職する、ウチは工業高校だし大学進学は難しい。まして俺の野球の実績じゃ大学や実業団からのオファーなんて無いんだ、自分の実力がどの程度かよく判ったよ。」

丹羽「そんな事言うけど、ホントは野球なんかより彼女とイチャイチャしていたいんだろ？」

柴田「正直そうかもな、ところでお前らはどうなんだよ？女関係は？」

前田「バッカ野郎！俺なんて男子高なんだぞ、女子との会話すら有り得ん。」

丹羽「俺は小中高と野球一筋だったけど、好きな人ができたんだ。これからはその人の支えでプロを目指す。こんな厳しい世界は、自分一人じゃ歩けない事に気が付いたんだ。」

柴田「何を歌詞みたいな事をほざいてるんだ？お前変わったな？」

前田「むううう、恋すれば人格をも変えてしまうのか、恐るべし。」

3人は甲子園で対決するという共通の夢を持ち叶えたが、プロ野球選手になるという共通の夢は3人とも叶わなかった。その後30歳になった3人を紹介しよう。

柴田は高校卒業後大阪の小さな民間企業に就職し、会社の有志で集まる野球チームで草野球を楽しみながら、休日は柴田達が巣立った少年野球チームのコーチを務めている。そのチームには高校時代からの彼女(今では奥さん)との間に授かった柴田ジュニアも毎日グラウンドで汗を流している。

前田は大学で教員免許を取り故郷の大阪へUターン就職するつもりであったが、大学卒業後在学中に知り合った彼女と結婚し第二の故郷青森で公立高校教員を務めながら野球部の監督を任されている。

丹羽は高校卒業後実業団野球でも活躍したのだがプロ入りは出来ず野球を諦めた。その後、山内と結婚し(実業団での野球を辞め)仕事に専念する今では持ち前のガッツと粘り強さを買われ、営業部門の課長職に就いている。

「またいつか一緒に野球やろうな。」

たまに連絡を取り合う3人の締め言葉であった。

ゲームセット(完)